

『時雨』

林田
麻美

○切通

ある夏の日。雨の釈迦堂切通前。
薄暗い空の下、木々の緑は異様に濃く、濡
れた岩肌は妙に生々しい。
幼い少女が二人、しゃがんでいる。姉妹の
ようだ。一つの赤い傘の下、じゃれ合いな
がら水溜りを覗き込んでいる。一人は赤い
ワンピース、もう一人は白いワンピースを
纏っている。
何か話しているようだが、切通を吹き抜け
る風の音にかき消されて聞こえない。
ふいに傘を持っていく姉が立ち上がり、く
るりと向きを変えて歩きだし、切通の中へ
と姿を消す。妹は尚も水溜りの前にしゃが
んだままである。
妹が一人で覗き込んでいる水面。いくつも
の波紋が広がる。そこに歪んだ少女の顔が
二つ浮かんでいる。
× × ×
誰もいない切通前。いくつもの波紋を湛え
た水溜りの先には通行を禁止するフェンス
が渡されている。
そのフェンス越しに、テレビ局の車が細い
坂道を上って来るのが見える。

○テレビ画面（朝）

朝のニュース番組。
画面右上には『特集 “光子ちゃん神隠し事
件” 未解決のまま25年が経過—』とある。
雨の切通前からの中継。過剰なまでに『落
石注意』の看板が掲げられたフェンスの前
にカッパ姿のリポーターが立っている。
リポーター「光子ちゃんは一体どこへ消えて
しまったのでしょうか。その日もちょうど今
日のように雨が降っていました。実際にこの
場所に立ってみると、濡れた岩肌が何か巨大
な生き物の胃か腸の内壁のようにも見受けら
れます。今でこそ、こうして通行を禁止する
フェンスが設置されていますが、当時は誰も
が自由に行き来できるようになっていました。

ここからおよそ80メートル離れた祖母の家に遊びに来ていた当時6歳だった光子ちゃん、当時4歳だった妹の琴美ちゃん。幼い二人にとっては、この切通を行き来することが胸躍るような大冒険だったことでしょう。しかし光子ちゃんは、その大冒険に出たままついに今日まで25年間帰ってくることはありませんでした。失踪当時の服装は赤いワンピース姿だったとのこと。尚、無事に保護された妹の琴美ちゃんは白いワンピースを着て出掛けていたとのことですが、発見時にはその衣服を纏っておらず、また記憶も失われた状態だったというのです。二人に一体何があったのか。もしもこれが神隠しなどではなく、何か考えたくもないような事件であったとすれば、今日が時効ということに――

○猪川家・食卓（朝）

テレビを消した猪川琴美（29）、食卓につく。正面には猪川宮子（54）が座っている。

朝食をとる二人。

宮子「光子、お醤油貸して？」

視線は琴美のやや横に向けられている。

無視してご飯を食べ続ける琴美。

宮子「お醤油。光子」

琴美、隣の席のすぐ前にある醤油を取って

宮子に差し出す。

誰もいないその席には、子供用の赤い箸が

一膳置かれていた。

宮子「ありがとね」

目玉焼きに醤油をかける宮子。

○水族館・外（朝）

開館前の水族館。通用口を入っていく琴美。

○同・内（朝）

水族館職員の制服を着た琴美。

クラゲの水槽の照明を点けて回る。

朝も昼も夜もないような、ひんやりと暗い

印象の空間に、幻想的な光を纏ったクラゲたちが漂う。

○ 出版社

とある週刊誌の編集チーム。
編集長のデスクの斜め前に宮本宗司（25）が立っている。
原稿をペラペラと捲りながら首を傾げ、溜め息をつく編集長。
編集長「つまらないよね。今回。手抜いた？
自分が生まれた日の事件だからずっと気になつてたんすよー」とか息巻いてなかつたっけ？
宗司「でしたっけ」
編集長「ネタ自体はいくらでも面白くできたはずでしょ？取材だって何度も行つてたよね？」
答えない宗司。
編集長「まあいいや。生モノだからね。これ以上時間かけられたら、それこそ誰も見ちゃくれないし」
適当に頭を下げ去る宗司。

○ 総合病院・待合室

男性用トイレから出てくる猪川信彦（59）。
手拭いで濡れた顔を拭きながら歩く。
目元のくま、こけた頬が印象的。
待合室の長椅子に腰を掛ける信彦。
前方に置かれた大型テレビではワイドショーをやっている。内容はやはり「光子ちゃん神隠し事件から25年」特集である。
落ち着かない様子ですぐに立ち上がり、その場を去る信彦。

○ 出版社・外・非常階段

ぼーっと辺りの景色を眺めながらタバコを吸っている宗司。
火を消し、足元に置かれたアルミのバケツに投げ入れる。
無数の短い吸殻で茶色く濁った水に、長め

の吸い殻が一つ加わる。

○同・内

宗司の席。隣の席の川島泰助（27）、戻って来る宗司の様子を見るなり、わざとらしく宗司のPCを覗き込む。画面には『：：母親の育児放棄により、父方の祖母の家に預けられていた際の悲劇だった。妹のKちゃんは無事に発見されるも、強烈なショックから記憶を失っており、さらに衣服も下着一枚しか身に着けていなかったという。第一発見者は父親であったが、警察に通報するまで数時間の空白がある。このことから、当初一部では父親による虐待と殺害・死体遺棄などが疑われていたのだが：：』などと記された文書。小声で読み上げる川島。

気づいて駆け寄る宗司。

宗司「おい」

川島「なんでこっち出さないの？」

宗司「ほっとけよ」

とデリートキーを長押し。

川島「あーあ」

文字がみるみる消去され、画面は白くなつていく。そこに琴美の声が重なる。琴美の声「たとえ世界中の誰もが忘れても私だけは姉を忘れない――」

○水族館

館内入口付近にある土産売り場前。

入口の方から並んで歩いてくる琴美と宗司。

琴美の右、土産売り場側に宗司という並び。

琴美は週刊誌を読み上げながら歩いている。

琴美「その限り、姉・光子の存在は決して

この世から消えたりしない――

琴美、鼻で笑って週刊誌をぱたりと閉じ、

宗司に渡し、

琴美「そんなこと言いましたっけ？私」

宗司「え？」

ふざけた笑みを浮かべ、ごまかそうとして

いる。

琴美「（宗司を真似て）」「え？（笑）」「じゃなくで」

宗司「あ、取材料振り込まれますから。近いうち」

琴美「（また鼻で笑い）取材料」

と言う琴美の横で宗司は何か別のものに気を取られ、一瞬足を止め、琴美の背後を回って左側へ移動する。

琴美「何？」

宗司「え？」

とまた何かをごまかすような笑み。

琴美「出ました。」「え？（笑）」「

宗司、右側の土産売り場をチラ見して、

宗司「あれ。苦手なんですよ」

琴美「どれ？」

宗司「あの、キーホルダーが掛かってる、フ

ック？金属の。なんであんなにっばいあんす

か？どうせ誰も買わないっしょ。勘弁だわマ

ジ。俺、軽いセンタンなんすよ」

琴美、通路に面した土産売り場のキーホル

ダーコーナーナーに目をやる。

いくつものフックの先が、揃ってこちらを

向いている。

琴美「え、何？あれ？先端恐怖症ってやつ？」

宗司「ええ。軽いやつすけど」

琴美、鳥肌の立った宗司の腕を見て、

琴美「全然軽そうに見えないんですけど」

と意地悪な笑みを浮かべる。

○総合病院・廊下

ため息をついて携帯を取り出し、連絡先リストをスクロールする信彦。

年季の入った腕時計をしている。

一瞬、『琴美』で止まるが、すぐにスクロー

ルを再開する。

○製薬会社・研究室

電話が鳴る。出る押田正則（60）。

押田「はい。松澤製薬、第一研究室です」

信彦の声「あ、押田？俺。猪川」

押田「ああ。どうした？」

信彦の声「悪い。今日また午後出勤になる」

押田「かまわないよ。お母さん、また急変？」

信彦の声「いや。今回は体じゃなくてね、頭

の方で（弱みを隠すように軽く笑う）。夜中に

病院徘徊して騒ぎだしちゃったみたいで。呼

び出し喰らって」

押田「そうか……こっちは大丈夫だから休み

とれば？」

信彦の声「いや、もう全然落ち着いてるから」

押田「いやさ、お前が心配なんだよ。最近ほ

んと寝てないだろ？あからさまに顔色悪いぞ」

信彦の声「歳のせいだろ」

押田「俺のが上だがツヤツヤだぞ。（自分の頬

をさすりながら）うん、ツヤツヤ」

信彦の声「美肌サプリの神は違うね」

押田「癩だね。まあさ、ほんと休めよ。あと、

少しは使ったらどうなの？安定剤とか」

○総合病院・廊下

携帯で電話をしている信彦。

無意識にやつれた頬をさすりながら話す。

信彦「俺はほんと大丈夫」

押田の声「頑なだな。（皮肉に笑い）そんなに

信用できないのか？自分のつくったもんが」

信彦「怖いんだよな、どうも」

押田の声「それ言うか？恐ろしい奴だな」

信彦「そういう意味じゃないよ。その、自分

もしよせん物質なんだって実感させられるじ

ゃない？あれが効いちやうとさ……。そうい

うのが、なんだかね」

○製薬会社・研究室

電話をしている押田。

近くの棚には治験結果に関する資料などが

並べられている。

押田「ほう。（鼻で笑って）ま、それ前提に俺

ら仕事してるわけだからなあ。今更何だよ」

信彦の声「感情や思考や記憶は全てただの化

学反応でしかない。その化学反応を恣意的に操作するのが俺の専門なわけだろ？」

押田「まあ。極論だが」

信彦の声「自覚していながら、それを利用して楽に生きようっていうのは、ちよつとあれじゃないか。卑怯な気さえ……」

治験結果に関する資料を一つ取り出し、パラパラと捲ってみたりしながら、

押田「卑怯ねえ。自覚なら何も専門家じゃなくたってしてるぞ？お前、自分だけ特別な、

神か何かのつもりでいたのか？（失笑気味に）」

信彦の声「……や、」

押田「すまない」

信彦の声「いや。言う通りだよ」

押田「まあほんと、疲れてるんだろう。余計心配になった。とにかく休めよ？少しは。な？」

○総合病院・廊下

信彦「お気遣いどうもね。ま、とにかくまた後ほど」と電話を切る。

○同・病室

病室に入ってきた信彦に、古い写真を見せる猪川キヨ（82）。

ベッド横のパイプ椅子に腰掛ける信彦。

キヨ「ほら先生、可愛いでしょう？孫なんですよ」

信彦、適当に相槌を打つ。

キヨ、幼い姉妹が映った写真を愛おしげに見つめ、背の高い方から順に指さし、

キヨ「こっちの子が光子で、こっちの子が琴美。もうずいぶん大きいのよ。光子は今、え

えと……どうしたのかしらね、思い出せない。ああ、でもこっちの琴美の方はね、今は水族

館で働いていて――」

○水族館・クラゲコーナー

クラゲコーナーを歩く琴美と宗司。その映像にキヨの声が重なっている。

キヨの声「昔から海の生き物、中でもクラゲが好きな子で。ゆーらゆら、ゆーらゆらして入らして、あのおかしな雰囲気がお気に入りでしょ？あ、初めて見た時、水槽にへばりついたまま離れなくなっちゃって。困っちゃったわね。まあ、お姉ちゃんより引っ込み思案な子だったんだけど、好奇心は人一倍で」水槽の奥に目立たないよう設けられた黒いドアを開け、中へ入る琴美。宗司も続く。

○総合病院・病室

キヨ、写真を見つめたまま、キヨ「ほーんと、可愛いでしょう？今はもつとべつぴんさんよ。会いたい。(信彦を見上げ)ねえ、先生？」
信彦、疲れた顔で微笑む。

○水族館・バックヤード

クラゲコーナー裏のバックヤードに琴美と宗司がいる。
雑多に並べられた水槽や装置。
それらを少し物珍しげに見ている宗司。
クラゲの餌となるブライン・シュリンプの孵化などが行われている。
琴美、請求書にサインして宗司に渡す。

琴美「これでいい？」
宗司「あ、はい。(受け取り)どうも」

琴美は温度計を確認したりしている。
宗司「何か変わりました？時効で」

琴美「何も。変わらないでしょう、そりゃ。被害者も加害者もいないんだから。そういうことになってるんだから。始めから」

宗司「ふーん」
琴美「何その反応。自分で聞いといて。まあ、どっかの記者さんは来なくなると思っただけだ。いい加減」

宗司「え？」
琴美「でもまあ、これで最後か」

宗司「ああ、まあ、そうすねえ……(週刊誌を丸め)なんかもうこういうのも飽きたんす

よねえ：：（室内を見渡し水槽に目を留め）
クラゲの記事でも書こうかな、今度は」
琴美「はあ。興味あるの？」
宗司「いや、全然。わっかんないすね。なん
でそんなに鼻屑してんすか？クラゲばっか」
琴美「だって面白いじゃない？見てて飽きな
いでしょ？」
宗司「」でしよ？“”って：：（苦笑気味）」
琴美、クラゲの水槽の前に移動し、急に好
きなものについて夢中で語る少年のような
目になり、
琴美「知ってる？クラゲって脳髓がないの」
宗司「？」
琴美「なのに、いや、だからなんだろうね、
こんなに悠々と泳ぐことができ」
宗司、水槽の中をまじまじと見つっ、
宗司「悠々と：：なんか周りの奴と足絡まっ
てますけど：：つか、え、千切れてません？
こいつ、足。うーわ、こっちも」
琴美「え？あはっ、ほんとだ。でもそういう
のもどうでもいいんじゃないかな。自分と自
分じゃないものの境界とか気にしてないのよ、
そもそも」
宗司「はあ：：」
水槽の正面から、千切れて水中に散った足
を見ている。
琴美「自我ってやつがない。脳髓がないこと
の最大のメリット」
水槽の真上から、プカプカと浮かぶ丸い頭
を俯瞰している。
琴美「だから下手に競い合うこともなければ、
特定の他者に何かを求めることもしない。平
和で自由な世界なんですよ。こん中は」
宗司「（ややポカンとして）：：いやー、自由
ねえ：：自由っすかー」
水槽から距離をとり、改めて泳ぐクラゲた
ちを眺めて、
宗司「そういうこと、もっとデカイ水槽に移
してやっってから言ったらどうです？」
琴美「（我に返ったように宗司を見て）あはは

っ！ごもつともです。ごもつとも！」

業務モードに戻り、スポイトを使って孵化したブライン・シュリンプをクラゲの水槽に移す琴美。

宗司、それを目で追い、
宗司「すごいな、なんか。あなた変だわ。よく言われませんか？」

琴美、淡々と餌やりを続けながら、
琴美「私だって相手選んで話しますよ？こんなこと。普通の人には言わないわ」

宗司「俺も普通すけどね」
琴美「そうですか。じゃあ忘れてください」

宗司「はあ。しかしあれですよね。イルカシヨ―とか、そういう花形な仕事には憧れたりしなかつたんですか？」

琴美「え？ああ（笑）、泳げないんだよね、私」
宗司「あ、泳げない。ああ！（ケタケタと過剰に笑う）」

琴美「（作業する手を止め）何よ」
宗司「いや、泳げなそうだなー、って。（改めて顔を見て吹き出し）はいはい、泳げなそうだわ。生粋の金槌顔です」

琴美、ケタケタと笑い続ける宗司にスポイトの先を向ける。
笑みが消え一気に顔面蒼白になり、ぐっと身を引く宗司。

勝ち誇ったように笑う琴美。
八重歯が覗いている。

宗司、その琴美の顔をまっすぐ見つめ、唾を飲んで気を静め、スポイトの先に近づく。
スポイトの先が宗司の鎖骨のやや下あたりに触れ、シャツに水が滲む。

琴美、身を引き、腕を下ろす。
スポイトの先から水が数滴、ぽたり、ぽたりと滴り落ちる。

琴美「…：何よ」
宗司「（不敵な笑みを浮かべ）鬼だな、って」

琴美「…：何それ」
宗司「いや」
しばしの沈黙。

琴美「あなたやっぱり独特だわ。コミュニケーションの取り方が。うん、変」
宗司・琴美「：：（やや琴美が遅れるがほぼ同時に声を重ねて）え？」
馬鹿にし合うように笑う二人。

○神社（夕方）

お参りをしている宮子。
境内では近所の子供たちが遊んでいる。

○水族館・バックヤード（夕方）

根本希美（30）が携帯で電話をしている。
根本「うん。さっき保育所から電話あって：
：そう、急に熱出たみたいで：：39度とか言
ってたけど：：うーん、多分ねえ：：」
琴美が入って来る。

根本、ちらりと見て部屋の隅の方へ移動し、
少し声のボリュームを下げて話を続ける。
根本「うん、悪いんだけどお願いしていいか
な？：：助かる。先生にもよろしく伝えて：
：あ、お母さん？いつもごめんね。ありがと
う。：：え？ちよつとね。言いたくなった。
はい。はい」

電話を切る根本。
待ち受け画面には幼い男の子の写真。
琴美、自分のカバンをあさりながら、

琴美「孝ちゃん具合悪いの？帰ってあげた
ら？何かあれば私やっつくし」
根本「大丈夫。このくらいの子にはよくある
のよ。けどよく来ますねー、あの記者さん」
琴美「え？ああ」
根本「今度は年下ですか。いいですねえ、気
楽で」

琴美「嫌味ー。違います」
根本「（からかうように顔を覗き込み）どうだ
かねー？」

笑いながらドアを出ていく根本。

×

悠々と泳ぐクラゲたち。

×

×

常備薬を飲む琴美。

ピルケースをカバンに戻し、部屋を出ようとする琴美。
と、携帯に着信が。画面には『父』とある。すぐに出る。
琴美「もしもし」

○総合病院・廊下（夕方）

長椅子に浅く腰掛け、少し落ち着かない様子で貧乏ゆすりなどしながら電話している信彦。

信彦「あ、琴美か？久しぶりだな。元気か？」
琴美の声「久しぶりだな、ってさ、お父さんが全然電話に出てくれないんじゃない。忙しいの？仕事」
信彦「ああ、まあ。ごめんな」
琴美の声「いいけど」
信彦「琴美？」

○水族館・バックヤード（夕方）

琴美、部屋の奥の方へ移動している。
琴美「ん？」
信彦の声「おばあちゃんんだけど、」
琴美「え？」
信彦の声「ちよつとな、うん、よくないんだ」
琴美「…：よくないって？」
信彦の声「いや…：もうほら、歳だからな」
琴美「そう…：」

○総合病院・廊下（夕方）

長椅子に腰掛けたままの信彦。貧乏ゆすりは止んでいる。
信彦「近いうちにさ、見舞いに来てやってくれないかな？時間あるときでいいから。待つてるんだよ、琴美のこと」
琴美の声「（少し拗ねたような口調で）光子じやなくて？」

目の前の病室から看護師が出てくる。
奥に、写真を握りしめて看護師を見送るキヨが見える。
信彦「琴美のことに关してはずいぶんしつか

りしてるよ。俺のことはほとんどわからない
みたいなんだけど。だいぶボケちゃってて」
琴美の声「：：：そんななの」
ドアが閉まり、看護師は信彦に軽く会釈し
て廊下を歩いていく。
信彦「しょうがないよな。まあ、待ってるか
ら。あとでメールに病院の住所送っとく」

○水族館・バツクヤード（夕方）

琴美「クラゲの水槽を眺めながら話してい
る。」

琴美「うん。わかった」

信彦の声「おう。じゃあ、」

琴美「あ、お父さん？」

信彦の声「ん？」

琴美「あんまり無理しちゃだめだよ？自分だ
ってもういい歳なんだから」

信彦の声「大丈夫だよ」

琴美「ほんと？ならいいんだけど：：：」

信彦の声「うん。じゃあ」

琴美「：：：じゃあ」

電話が切れる。

しばらく間を置き、切るボタンを押す琴美。
水槽に歩み寄り、指でガラスを弾いてみる。
一切反応しないクラゲたち。

○猪川家

ベランダで洗濯物を干している宮子。

リビングでテレビを見ている琴美。

テレビでは『サンデー○○』という番組を
やっている。

空のカゴを提げて中へ入って来る宮子。

琴美「ねえ、お母さん。鎌倉のおばあちゃん
（なんだけど、）」

固定電話のベルが鳴り、遮られる。

宮子、テレビを消して電話に出ようとする。

が、琴美が先にとる。

琴美「はい、猪川です。（宮子をちらりと見て）
いえ、娘ですが。：：：はあ。：：：ええ。：：：

おりますが、二年くらい前に脱会してますよね？：：ええ。ちよつと申し訳ないんですが。：：はあ。ええ。では」

受話器を置き、
琴美「〇〇教の立川さんって人だったけど。お布施がどうのって」

宮子「あらそう」

琴美「もう関わりないんだよね？」

宮子「ないって。それに大体あなたが思うよ
うなあれじゃないのよ？あんまり失礼な対応
しないですよ。ほんつとに、お母さんのやるこ
となすこと気に入らないのね」

琴美「（溜め息をつき）そうじゃないけど」

宮子も溜め息をつき、出掛ける準備をする。

琴美「どこ行くの？」

宮子「ちよつと」

琴美「ちよつとって？」

宮子「神社。すぐそこ」

琴美「待って、私も行く」

立ち上がる琴美。

宮子「：：勝手にしなさい」

○神社

本殿に向かつて拝む宮子と琴美。

先に目を開ける琴美。

数秒後、宮子も目を開ける。

二人、向きを変え、階段を下りる。

境内の真ん中の通路を歩きながら、

宮子「ねえ、お母さんがいつも何お祈りして
るかわかる？」

琴美、答えず。

鳥居へ続く石段を下り始める二人。

宮子「絶望させてください」

琴美、立ち止まり、石段を下り続ける母の
背を見る。

宮子「絶望させてくださいって、ただそれだ
け祈ってるの。もうずっと、それだけ」

石段を下りきる宮子。そのまま歩き続ける。

琴美、石段の中段に取り残されている。

その背後の境内では、幼い子供たちが鬼ご

っこななどをしてはしゃいでいる。

○猪川家・外

ベランダに干された洗濯物が風に揺れる。
衣類は50代半ばの女性ものと30前後の女性
ものだけである。

○神社

石段の最下段、鳥居の柱にもたれるように
して、携帯を操作する琴美。
『父』に発信。
数回呼び出し音が続き、ただいま電話に出
ることが、というアナウンスに切り替わる。
一度切り、再び電話をかける琴美。

○公園

ベンチに腰掛け、幼い女の子を見守る中年
男の後ろ姿。
男、ふと着信に気づき、携帯をとる。
血管が浮き出てしわの寄った手。
年季の入った腕時計をしている。

○神社

石段の最下段に座り込み、電話をしている
琴美。

琴美「うん。今日。：：やーだ！今日今日！
今日だけは今日！今日なんです！」

小1くらいの女兒が軽蔑混じりの目で琴美
を見下ろし通り過ぎていく。

琴美「（トーンダウンし）……ダメ？」

○居酒屋（夜）

宗司と川島がサシで飲んでいる。
川島「母親の育児ノイローゼ。その最中の父
親による幼女凌辱でしょ？んで、殺害、死体
遺棄。そして妹は強いショックのため記憶喪
失：：そんな真実を受け入れられぬまま今尚
家族の時間は止まっている、ってね。いいと
思ったけどね。俺は。そういうの好きじゃん
よ、世間は」

宗司「よせよ。25年前に散々ネタにされたことだし、そもそも真実じゃないし。全然」
川島「ほんとにか嘘かなんて関係ないだろ？俺ら警察でも裁判官でもないわけだしさ。世の暇人どもをどれだけ楽しませることができなくて、それだけ考えてればいいんだよ」
と箸先を宗司に向ける。
宗司「やめて。それ」
川島「あ、ごめん」
と箸を下ろす。
宗司「まったく、低俗なもんだよな。お前も世間も」
料理に手をつける宗司。
川島「言ってくれるねえ。でもその低俗さにあやかかって飯食ってんだぜ？お前。勘違いするなよな」
宗司「るせーよ」
箸を置く。

○バー（夜）

カウンター席でウイスキーを飲む中年男の手。年季の入った腕時計をしている。
男は澤井基治（55）である。
隣に琴美がいる。宙に浮いた足を、子供のようにならぶらぶらと揺らしている。
澤井「で、どうされました？」
琴美「え？（宗司風のふざけた笑い）」
澤井「なんだかねえ。こっちは真面目に心配してんのに」
琴美「…ちよつと」
澤井「ちよつとですか」
琴美「（無邪気に笑う）」
澤井「あーあ、また騙されちゃったよ。そういう悪ふざけはさ、もつと若い子相手にしたら？おじさんは色々あるんですよ」
琴美「別に悪ふざけじゃないもん」
澤井「じゃあ暇つぶしだ。しかしあれだね、あなた別に俺のこと好きじゃないでしょ？」
琴美「えー？何それ？なんで？」
澤井「なんですって、至って自然な疑問だと思

いますけどね」

琴美「なんて答えてほしいんですか？好きって言われたいの？普通のカップルみたいにかからかうように笑って」ちやつかりー」

澤井「いやもう」

琴美「ぶらぶらと揺らしていた足を落ち着け、グラスの中の氷をマドラーで突いてみたりしながら、

琴美「好きじゃないです。いや、人よりは好きだけど、自分よりは全然。多分」

澤井「…（琴美の横顔を見る）」

琴美「澤井さんは自分の大事なものを犠牲にして私に尽くしたりしないでしょ？絶対に。だから楽なんですよ。そういうのがちよūdいい」

澤井「（呆れ気味に笑って）勝手だねえ。勝手」

琴美「なんですか？含んじやって」

澤井「いや。たださ、全か無かの人間なんだなって」

琴美「は？」

澤井「自分が求める全てが与えられない限り、受け入れようとしたくないんだ。あなたが勝手に。なのに、まるで相手が何も与えてくれてないみたいなの顔してる。悪びれもせずに、だ」

琴美「…」

澤井「傷つくぜ？それ結構。周りには」

琴美「なに急に。お説教ですか？（バーテンの方を見て）どういう立場でおっしゃってるのかしらね」

わざと性悪な笑みを浮かべる琴美の横顔。八重歯が覗く。

○居酒屋（夜）

川島「けどさ、お前まだ通ってたろ？猪川琴美のどこ」

宗司「え？（笑）」

川島「なに、惚れた？」

宗司「そういうんじゃないよ」

川島「へえ。じゃあ何？」

宗司「いや…あの人さ、鬼なんだよね」

川島「は？」

宗司「子どもん時、鬼ごっこってしたっしょ？」

川島「したけど」

宗司「あの、鬼に捕まりそうなきの感覚。変な感じしなかった？」

川島「え？」

宗司「なんつーのかな：：捕まりたくない、逃げなきゃ、って思ってるはずなのに、なんかこう、わー怖い怖い怖い！“ってある極限まで追い込まれると、ふっと、その怖いことを自ら迎え入れたくなるような。そういう感じ？なんか変に癖になるっていうか」

川島「はあ？何お前、どエム？悪いけど俺ちよつとわかんないわ」

宗司「（笑い）そっすよねー。いや、前に話したと思うけど、俺殺されかけたことあって」

川島「ああ。小っちゃい頃、弟さんにだっけ？」

宗司、シャツの襟口に手をかけ少し下げ、鎖骨周辺に散った傷跡を見せる。

宗司「そう。ドライバーで、ガンガンガン。血液ぶわー、声ひーひー」

川島「（苦笑して）やめてー。酒がまづくなる」

宗司「ふははっ」

と襟口を引っ張る手を離す。

赤い顔。相当酔っている様子。

宗司「だから俺、死ってやつが、ほんと、リアルに怖くって。いやもう、怖くて怖くて死にたくなっちゃうの。殺人鬼とか取材してるどゾクゾクくんよねー」

と笑いながら酒を飲む。

川島「（何か勘付いて急に真顔になり）え、じやあ何？お前まさか疑ってんの？」

宗司「いや、わかんないけど。でも、あるんだよね、あの人の傍にいます。鬼に追い込まれた瞬間のあの変な感じが。まあ本人は百パー無自覚だけ」

川島「へえ。ほんとだとしたら面白いな。時効過ぎてても十分釣れるよ」

宗司「いや別に書く気はないよ」

川島「（笑って）ほお。じゃあ極めて個人的な

趣味なわけだ」
宗司「へへ。怖くて怖くて捕まりたくなっちゃう（と邪気たっぷりに笑う）」
川島「どっちが鬼だかねえ」

○ホテル・ベッドルーム（夜）

枕元に澤井の腕時計と、開封済みのコンドームの袋が2つ。
無心の表情の琴美が一人ベッドに。
浴室の方から澤井の声が聞こえてくる。
澤井の声「ああ、ごめんな。：：うん、お仕事だからしょうがないんだよ。：：え、針千本？ああ、そうだなあ：：」

○同・浴室（夜）

腰にタオルを巻いた澤井。
どこか後ろめたさを感じさせる猫背気味の姿勢で浴槽の縁に腰掛けて電話をしている。
少し弛んだ腹周りが印象的。
澤井「え、お母さんそんなこと言ってるの？十本たったって、喉に刺さるもんなあ：：ほんとは飲んだら死んじゃうよ？お父さん」

○同・ベッドルーム（夜）

澤井の声「え、いいの？いいの？ああ：：お父さんは嫌だなあ。悠子に会えなくなるもの」
布団に潜り込んで澤井の声から逃れようと
する琴美。

○猪川家・食卓（夜）

澤井の声（以下の映像に重なる）「ほんとだよ？いいの？：：えー、二度と会えなくなっちゃうんだぞ？」
赤い箸の置かれた席の方を見て微笑む宮子。
一人美味そうにご飯を食べている。

○ホテル・ベッドルーム（夜）

携帯を片手に浴室から出てくる澤井。
布団に潜ったままの琴美。
琴美の声「神隠しー」

澤井、ベッドに腰掛け、布団をそつと捲る。
琴美、二カツと笑う。

澤井「なんだか、今日はずいぶんですね」

呆れ顔で枕元の腕時計に手を伸ばす澤井。

その腕を掴み、潤んだ目で澤井を見る琴美。

澤井「……無理だよ。歳だし、(コンドームの

空袋を顎で指し)ほら、もうない。おしまい」

琴美「(呟くように)大丈夫だよ。ピル飲んでるから」

澤井「そう言われましても」

琴美「不発だったじゃん。さっきの」

澤井「(溜め息)だから歳なんだよ。悪かったな」

琴美、再び布団に潜り、体を丸める。

琴美の声「(ぼつりと)私が消えればよかったんだ」

澤井、盛り上がった布団を複雑な表情で見つめる。

○猪川家(朝)

爽やかな朝の光の中、やはり赤い箸の席と向き合い、一人幸せそうに食事をとる宮子。

○水族館・イルカの水槽前

獣医師が往診に来ている。澤井である。

巨大な分厚いガラスのイルカの水槽の前で

根本と話している。

澤井「大丈夫ですよ。このままいけば無事に

生まれるでしょう」

根本「ああ、よかった。引き続きよろしくお願いします」

琴美がその背後を素通りする。

礼を言つて澤井を見送った根本、琴美を追

つて来て髪の毛の匂いを嗅ぎ、

根本「あれれー？なんか同じ匂いがするー」

無視して歩く琴美に付きまとい、

根本「あれれれれれえー？」

琴美「ヤな女」

根本「あなたに言われたくないわ」

○神社（夕方）

本殿に向かって拝む宮子。
目を開け、振り返る。
境内の端に、一人ブランコで遊ぶ子供の姿がある。
ピカピカの赤いランドセルを背負った少女である。

○喫茶店（夕方）

窓際の席に宗司と琴美。
コーヒーなど飲みながら話している。
琴美「で、どうされました？今日は。時効ラ
イターさん」
宗司「別に時効専門ってわけじゃないです」
琴美「ふーん。まあ、これ以上私からは出て
きませんか？何も」
宗司「いや：：真面目に、その後どうです？
たまには時効後の家族の変化とか追ってみる
のもいいかなって。何か吹っ切れて前向きに
なれた感じとか、そういうのないですか？」
琴美「暇だね。ほんとに何も変わらないよ。
っていうか、悪化してる。母親は、いよいよ
ちよつと頭ヤバいんじゃないかって思うし、
父親は逃げっぱなしで、こっちから電話して
も全然出ないし」
宗司「ああ：：」
琴美「あ、こういうの、むしろ好物？」
宗司「いえ。なんかすいません」
琴美「ああ、謝るとかできる子なんだ」
宗司「子ってなんすか」
琴美「ごめんね（と笑う）」

○神社（夕方）

誰もいない境内。
ブランコが微かに揺れている。

○喫茶店・外（夕方）

店を出て並んで歩く宗司と琴美。
喫茶店は駅前に位置しており、すぐそこに
駅が見える。

琴美「ごちそうさま」

宗司「いえ、取材ですし」

琴美「直帰？」

宗司「直帰：：：つつーか、今日代休なんで」

琴美「（笑って）仕事じゃないんじゃないんじゃん」

宗司「いや、ええ、まあ」

琴美「家は？近いの？」

宗司「〇〇です」

琴美「あ、そうなんだ。じゃあ××線？」

宗司「はい」

琴美「一緒だ。一駅歩けば電車代浮くよ。こっち」

と駅に背を向けて歩きだす琴美。

宗司、ついていく。

○道・猪川家近辺（夕方）

赤いランドセルの少女の手を引き歩く宮子の後ろ姿。

○道（夕方）

宗司と琴美、歩いている。

会話は無い。

ふいに二人の手の甲が触れ合う。

琴美、さっと手を引く。

宗司、咄嗟に距離をとり、

宗司「すいません」

琴美「え？（笑）」

宗司「それ俺のー」

琴美「（笑い）うつつた」

宗司、空いた距離を詰めようとする。

琴美、さりげなく平行移動。

不自然な距離が保たれる。

しばし気まずい沈黙。

琴美「：：：ねえ聞いてくれる？」

宗司「はい？」

琴美「私、抱きしめられた記憶がないんだよね、母親に」

宗司「：：：」

琴美「何言ってるんだこいつ、って話だよ（笑）」

宗司「：：：っすねー」

琴美「いや別にね、だから寂しいとか、そういう話じゃないんだけど。ただちよつと、そのせいなのか、わかんないんだよね。人との自然な距離のとり方みたいなのが」
宗司「（小さく首を傾げ）自然、っすか……皆そうなんじゃないですか？俺あんま自然な人って知らないですけどね」
琴美「？」
宗司「あなた自分を特別視しすぎ」
琴美「（ふつと笑う）」
二人の距離が詰まる。

○猪川家・前（夜）

自宅前に立つ琴美。
顔にパトランプの赤い光が反射している。

○警察署（夜）

ロビーの長椅子に座り、小さく鼻歌（『通りゃんせ』のメロディー）を歌っている宮子。
そこから少し離れたところで琴美が警官に頭を下げている。

琴美「ほんとにご迷惑をおかけしまして……」
警官「いえ。あちらのお子さんも遊んでもらってただけだって言ってますし、ご家族の方も無事に見つかったんだから今後こういうことがなければ、と」
琴美「そうですか……すみません。私の方でも気を付けますので。以後、ほんとに」
警官「あ、いや……その、ちよつと申し上げにくいんですけどね、一度診てもらってはどうですか？専門医に」
琴美「いえ、私がちやんとついてれば大丈夫だと思いますので……」
警官「や、わかるんですがね、お気持ちは。もしあれでしたら信頼できるところ紹介しますよ？」

二人、宮子の方を見る。
相変わらず鼻歌を口ずさんでいる。
その背後を母子が通る。
琴美、頭を下げる。

母親、宮子から守るように赤いランドセルの少女の手をぎゅっと握る。

×

×

×

過去の映像が重なる。

自動ドアを入って来る30代前半の宮子。

警官に手を引かれ、奥の廊下から出てくる幼い琴美。

警官、もう片方の手にはピカピカの赤いランドセルを提げている。

宮子「琴美！」

宮子、周りが見えていない様子で一目散に琴美に駆け寄り、膝をつき強く抱きしめる。

琴美は体を強張らせている。

警官「お父さんに会いに行こうとしたそう
で……」

宮子「さらにきつく琴美を抱きしめ、
の傍にいて。ね？お願いだから」
目を真っ赤に腫らした宮子。

情けないほど必死で琴美の小さな体にすがり付いている。

一方の琴美は、体を強張らせたまま無表情である。

×

×

×

自動ドアを出て行く母子。

警官「猪川さん？」

琴美「(はっとして)ごめんなさい」

警官「ね？あなたが疲れちゃ、元も子もない
んですから」

琴美「……」

○総合病院・病室

信彦とキヨがいる。

キヨ「引出しから古い写真を取り出し、
キヨ「先生、見て？孫なの。こっちの子が光
子で、こっちの子が琴美」

新聞を捲りながら、ふんふんと適当に相槌
を打つ信彦。

キヨ「光子は今……(表情曇る)えっと……
(表情明るく)琴美は今ね、」

○精神科・病室

ベッドに宮子。

傍らの椅子に座っている琴美。

宮子「（窓の外を見ながら）ああ、すっかり夏。早いわ：：ねえ？光子」

○猪川家

一人で家中を片付けている琴美。

押入れからランドセルを二つ引っ張り出す。両方とも同じように埃をかぶっているが、一方はボロボロで、もう一方はピカピカのままである。まとめてゴミ袋に入れる。

○同・庭

庭先に、四角く底の深いアルミ製の缶箱。琴美、その上で大きなアルバムをバサバサと揺さぶって写真をいっぺんに缶の中へ落とそうとしている。しかしそう都合よくは落ちず、仕方なく一枚ずつ手で取り出し、缶に放っていく。そのほとんどが幼い姉妹が仲良さげに笑って映っている写真である。空に雲がかかり、辺りが少し暗くなる。

×
写真を溜めた缶の中へ、最後に子供用の赤い箸を入れる琴美。×

琴美「（小さく呟く）ごめんね」

ライターで火を点ける。燃え始める写真。次第に大きくなる炎を見つめながら小さく鼻歌（『通りゃんせ』のメロディー）を口ずさむ。

と、タイミングを計ったかのように俄雨が。火はあっけなく消えてしまう。

中途半端に燃え残った写真の数々。

箸はほとんど燃えておらず、綺麗なまままだ。項垂れ、一枚の写真の切れ端をつまみ上げる琴美。

背の低い少女の側だけ燃えていて、もう半

分は無事である。
それを地面に置き、冷たい目で見下ろす。
そして缶箱から赤い箸を一本取り出し、写真の中の少女の顔を目がけて何度も何度も振り下ろす。
琴美「(泣きながら)消えてよ、もう……お願いだから」
ぐちゃぐちゃになった少女の顔。

○同・室内

家に入り、携帯を見ると父親からの着信が。それをしばし見つめた後、電話をかける。
琴美「お、出た。ねえ今日この後って」

○総合病院・病室

ドアを開けて入って来る田村峰子(79)と田村宏(57)。

信彦「ああ、どうも遠いところすみません」
会釈をする峰子、宏。

峰子「眠ってる？」
信彦「ええ」

峰子「片足を引きずって寄ってきて、
峰子「あら……ずいぶん痩せちゃってえ、お義姉さん」

信彦「仕方ないですよ」

峰子「悪かったんねえ、こんなになるまで顔見せられなくて。私もね、足悪くしたりなんだり」

信彦「いえ、わざわざ遠いところ来ていただいて。ほんとにそれだけで」

峰子「信ちゃんも痩せたんじゃないの？ちよっと」

信彦「そうですかね。まあ歳ですから、僕も」
宏が紙袋を出すよう促して、

峰子「あ、これつまらないものなんだけど、お義姉さん、召し上がるかしら」

信彦「あ、すいません。どうも」
宏「気落とさないですよ。あんまり。また回復

するかもしれないし」
信彦「うん。ありがとう」

宏「俺、ちよっと」

と部屋を出て行く。

峰子「タバコ（と困り顔）」

信彦「（笑う）」

峰子「それにしてもねえ、ほんと、兄さんのことでお義姉さんには苦労かけてしまつて、私、もうなんて詫びたらいいか……」

信彦「そんな。もう昔の話ですし。母は幸せだったと思いますよ、僕は」

峰子「そうならいいんだけど……」

立ち上がり、片足を引きずって窓際に移動し、背を向けて話を続ける。

外は薄暗く雨が降っている。

峰子「お仕事の方は順調？」

信彦「（窓に映る峰子の顔を見て）あ、ええ、まあ」

峰子「今は兄さんみたいな人、世の中の理解もあつて、お薬で結構よくなつたりもするんですよ？」

信彦「そうですね……」

峰子、窓に映る信彦から視線を逸らし、自分の手をさすり合わせるなどしながら、峰子「ああいう人の辛さって、きつと大変なものなんでしょうけど、どうしたってね、わかつてやれなかつたわ。なのにお義姉さんは偉かつたわよ。ずっと辛抱強くいてくれて」

信彦「ええ。ほんとに強い人です」

峰子「（振り返り）私ねえ、お義姉さんは再婚して、新しい生活を始めたつてよかつたんじゃないかと思うのよ」

信彦「……」

峰子「まだ若かつたし、子供もあなた一人だつたんだし。（ベッドのキョに目を向け）何もこんなにも長い年月、あの家に縛られることなかつた」

信彦「母が、自分で選んだことですから」

峰子「（また背を向け）呪われてるんだわ。あの家、きつと。光子ちゃんのことだつて……」

信彦「……」

宏が戻つて来る。

宏「いやあ、雨ずいぶん強くなっちゃって」

○ 駅（夕方）

改札前に立っている宗司。

改札の向こうから琴美が現れる。

近づいて来ると、ずぶ濡れであることがわかる。

宗司「どうしたんすか？」

琴美「え？何？こっちから会いに来るのはダメなわけ？」

宗司「いえ別にかまいませんけど」

琴美「家出してきた。家、誰もいないけど」

宗司「は？」

琴美「いないからね、余計にいるんですよ。

敵いませぬね、まったく」

宗司「：：なんか怖いんですけど」

琴美「あ、お化けとかじゃないよ？」

宗司「いや、あなたが怖い、って（笑）」

琴美「ああ。ま、あの家に行ったら変にもなる

わ」

宗司「はあ：：。つか、他にないんすか？

行くところ」

琴美「え、だって近いし。ここ」

宗司「ああ。あんま友達いなそうですね」

琴美「ほっといて」

○ 切通（夕方）

フェンスと切通の間に水溜りができている。

水面に幼い姉妹が映っている。

赤い服の姉が白い服の妹の頭を押さえつけて

ているように見える。

○ 宗司の部屋（夕方）

クローゼットをあさる宗司。

Tシャツを二枚取り出す。

襟口がよれたものと、新しそうなもの。

自分はやれた方に着替え、バスルームの方

へ向かう。

宗司「タオルと、あと着替え、俺のでよけれ

ば置いときますんで、ご自由に」

琴美の声「ありがと！」

バスルーム前に置かれた琴美の携帯のバイブが鳴る。

宗司「鳴ってますよ？携帯」

琴美の声「あなたがそこにいちゃ出らんないけど」

宗司「ああ」

立ち去ろうとする宗司。

琴美の声「誰？」

宗司、振り向き、携帯画面に目を落とし、

宗司「澤井さんて人」

琴美の声「ああ」

宗司「いんすか？」

琴美の声「いい。やめたんで。もう」

宗司「あ、もしかしてあれすか、不倫とか」

琴美、応答しない。

宗司「ああ：：へえ：：（引いている）」

電話、切れた直後、再び着信。

バイブ音が響く。

琴美の声「電源落としといて」

宗司「（携帯画面を見て）いや、父ってなっ

ますけど、今度」

琴美の声「ああ。いや、それも。今はちよ

っと」

宗司「ふーん」

部屋へ戻る宗司。

鳴り続けている携帯。

○同・バスルーム（夕方）

携帯の音から逃れるように思いきり目を瞑

って鼻をつまみ湯に顔をつける琴美。

黒い髪が水面にぶわーっと広がる。

幼い少女の声が微かに響いてくる。

少女の声「ほら琴ちゃん、練習。お水にお顔

浸ける練習」

水中で目を見開き、パニックを起こす琴美。

○同・部屋（夕方）

バスルームからバシヤンという大きな音。

宗司、慌てて駆け戻り、

宗司「え、何？大丈夫すか？」
琴美の声「ごめん。軽く溺れただけ」
宗司「ちよ：：人んちで死なないでください
よ。色々厄介なんで」
琴美の声「すいませんね。ご心配なく」

○切通（夕方）

雨上がりの切通。
水溜りに一滴、赤い液体が落ちる。
白い服を着た少女の顔が映り込んでいる。
無心の表情で鼻血を垂らしている。

○宗司の部屋（夕方）

風呂上がりの琴美。ラフな格好。
タオルで髪を拭きつつ携帯を見ながら歩く。
と、そこへまた澤井からの着信。
切るボタン長押しする琴美。
電源ごと落ちる。
窓の外に、ベランダの手すりに半身を預けるようにして立ち、タバコを吸っている宗司の姿がある。
琴美、携帯をカバンにしまい、代わりにタバコを取り出してポケットに入れる。

○同・ベランダ（夕方）

ベランダに出てきて宗司に並ぶ琴美。
琴美「どうもね。いいお湯でした」
手すりにもたれる琴美。
と、水滴が落下すると同時に、二人分の重みで、手すりがミシツと音を立てて軋む。
宗司、一瞬ビクツとなり、直後、妙に生き生きとした笑みを浮かべ、
宗司「お、ゾクったー」
琴美「ったねー（笑う）」
宗司「すいませんね。ボロいんすよ、ここ。わりと」

二人、手すりから離れ、窓枠に並んで座る。
琴美「上がったね、雨。空がきれい」
宗司「つつすね」
琴美「私もいい？」

宗司「あ、吸うんすか？」
琴美「日に、一、二本だけど」
宗司「へえ。どうぞ」
タバコを差し出す宗司の手。
琴美「あ、」
とポケットから自分のタバコを取り出す。
差し出したタバコを引っ込める宗司の手。
×
タバコを吸っている二人。
琴美、ふと宗司のよれたシャツの襟口から
覗く傷跡に気づく。
が、すぐに目を逸らし、
琴美「ねえ家族は？」
宗司「え、なんすか。聞くの？」
琴美「ダメならいいけど」
宗司「じゃダメ」
琴美「そっちは散々聞いたくせに」
宗司「いますよ。普通？に」
琴美「？」
宗司「母と父と弟が一人。多分」
琴美「（笑い）多分」
宗司「離婚したんすよ。小2だったかな、そ
んくらいのととき」
琴美「ほー」
宗司「で、俺は母親の側で、弟は父親が連れ
てって。その後、あちらの人たちには記憶に
ある限り一、二回しか会ってないんで、よく
わかんないです」
琴美「へー。会えないの？会いたくないの？」
宗司「（曖昧に笑って首を傾げ）どっちすかね」
タバコの火を消す宗司。
琴美も続く。
だいぶ日が落ちてきている。
琴美「…暗くなるね」
宗司「はい」
琴美「あれだ、花火やるか花火」
宗司「は？ないすけど」
琴美「買って来るんだよ」
宗司「え？（笑）帰らないんすか？」

琴美「え？（笑）」

○総合病院・外・喫煙所（日没直後）

タバコの火を消し、携帯を取り出して発信する信彦。

アナウンス「おかけになった電話番号は電波の届かないところにあるか電源が」

信彦「もう一度電話をかける。」

アナウンス「はい、猪川です」

信彦「あ、俺（だけど）」

アナウンス「ただいま留守にしております。

御用の方は」

溜め息をつき、電話を切る信彦。

○公園（夜）

闇の中、小さな火が二つ動いている。

缶ビール片手に花火をしている宗司と琴美。

ぐいぐい飲む宗司。

琴美は陽気。少し酔っているようだ。

火を点けたばかりの花火をくるくると回し

ながら、意地悪な笑みを浮かべてその先端

を宗司の方へ向ける。

その明かりで、宗司のよれた襟口から覗く

鎖骨周辺の傷跡がよく見える。

宗司、動じず、

宗司「何？」

琴美「あれ？大丈夫なの？」

宗司「ああ。だってこれ、尖った部分見えな

いじゃないすか。明るすぎて」

琴美「ああ」

つまらなそうに手を下ろす琴美。

宗司「ヤな人ですよね。ほんと」

琴美「ねー（自己嫌悪気味な苦笑い）」

宗司「でもなんでこんなに明るいんですかね」

琴美「？」

花火の先を見ている宗司。

宗司「いつか燃え尽きんの知ってるから、見

てて落ち着かなくなる。ちよっと」

琴美「（笑って）何それ」

答えない宗司。

小さく首を傾げて火を見る琴美。
火が消える。焦げて黒く固まった先端。
宗司「でも、嫌いじゃないですけどね。俺は。
そういうのも」
琴美「（鼻で笑い）え、何なに？なんか気障」
宗司「別に他意はないですけど」
燃え尽きた花火を缶に突き刺す琴美。

○総合病院・廊下（夜）

医師と話している信彦。
医師「少し覚悟をしていたただく必要があるかと：：」
信彦「：：」
医師「今夜がそうですね、まあ、ええ」
信彦「それですか：：はい」
軽く頭を下げて去っていく医師。
廊下の長椅子に座り、項垂れる信彦。

○公園（夜）

ベンチに座っている宗司と琴美。
話題が見当たらず、黙ってビールを飲み続けている。
ベンチの下、二人の足元のやや奥に、ひっくり返った状態の蝉が一匹。
死んでいるようであったが、琴美の足が微かに触れた途端、けたたましい鳴き声をあげ、羽や手足をばたつかせて暴れだす。
飛び跳ねるように立ち上がり、離れる琴美。
手にしていたビールがこぼれる。
琴美の腕には鳥肌が。
ベンチに座ったまま、蝉よりも琴美のビビり様に驚いている宗司。
琴美「ダメなんだよね：：これ」
宗司「これ？（と足元を見る）」
琴美「（頷き）死体は怖くないんだけど、生き物が死んでいく過程みたいなのが、どうもダメで：：うん、無理だ。直視できない」
苦しみ続ける蝉。

宗司「そんなかねえ？」

琴美「え、怖くない？もう、なりふり構わず
「生きてるぞー、まだ生きてるぞー、生きて
いぞー」って主張してくるみたいなの……」
蝉を見て、身震いして、
琴美「あーもう、狂気狂気。こう、意思とか
そういうものとははや別次元での主張でし
よ、これ。ていうか、細胞一つ一つに意思が
あつて、それが皆好き勝手に必死で訴えてく
るみたいなの……」
宗司「……（首を傾げる）」
琴美「わかんない？この感じ。あーダメだ」
少し後ずさりをする琴美。
宗司、しゃがみ込み、蝉の足に優しく指を
添える。
蝉、それに足を絡み付け、大人しくなる。
宗司、それを近くの木の幹まで運んでやる。
ほっとした様子の琴美、ベンチに座り、ビ
ールを一口。
宗司、戻って来て、隣に座り、
宗司「大丈夫？」
琴美「うん。ごめん」
宗司もビールを口に運び、
宗司「それっていつから？」
琴美「え？」
宗司「いつからそんなに怖くなったの？」
琴美「さあ……生まれたときからずっとじゃ
ない？」
宗司「ずっと？死って概念を理解する前か
ら？」
琴美「えー。って言われると、そんな前のこ
と覚えてないし、わかんないけど……」
宗司「そっか」
とビールをぐいぐい飲む。
琴美「でもまあ、やっぱ怖いんじゃないかな。
概念云々以前に、その状況が目の前にあつた
ら」
宗司、缶をベンチに置き、花火に火をつけ、
宗司「ねえ、ちよっとさ、」
と琴美の手首を掴む。
琴美「え」

宗司「ちよつと教えて」
宗司、勢いよく火を噴く花火を片手に琴美を引つ張り、先程蟬を放した木を指す。
琴美「ちよ、何？」
手を振り払おうとするが、物凄い力で掴まれていて敵わない。
木の幹で大人しく死を迎えようとしている蟬に、突如火が放たれる。
叫びのような鳴き声とともに全身から音を発する蟬。上へ逃れていく。
琴美の腕にまた鳥肌が。
目を逸らす琴美。
耳も塞ぎたいが、片手しか空いていない。
宗司「見て」
琴美「なに急に？怖い」
宗司「いいから。今どうしたい？」
琴美「は？」
宗司「これは俺がやったことだけど、もし仮に自分でやったことかどうかという状況を生み出してしまったとして」
琴美「逃げたい」
宗司「逃げられない！」
琴美「なら終わらせたい！」
しばし沈黙する二人。
蟬の声や羽音が轟く。
琴美「……早く終わらせて。ほんと無理」
手を離す宗司。
宗司「すいません」
半泣きでその場から離れる琴美。
木の下に留まり、命尽きるまで蟬を焼ききる宗司。
焼け焦げて黒い塊になった蟬、ポトツと地面に落ちる。
花火も燃え尽き、先端が黒く固まる。
宗司、琴美の方へ歩み寄り、
宗司「すいません……」
琴美「やだ。来ないで。変だよ」
宗司「……ですよね。変だ。俺も、あなたも。あいつも。みんな変だ」
歩み寄り続ける宗司。

琴美「ごめん。帰る」

宗司「待って」

琴美「やだよ。怖いって、ほんと。悪いけど」

宗司「待って」

琴美「……」

宗司「お願い」

○総合病院・病室（夜）

苦しむキヨ。見ている信彦。

○公園（夜）

別々の方向を見てベンチに座っている宗司と琴美。

宗司「……俺、死にかけたことがあって」

琴美「？」

宗司「キチガイなんすよ、弟」

シャツの襟口を下げ、

宗司「これ。めった刺しにされたんです。弟に。父が出しっぱなしにしてたドライバーで。

ずっと昔ですけど。小学校上がるちよつと前くらい」

琴美「ああ……」

宗司「そんな昔の記憶なんてないじゃないですか、普通。ほとんど。でも、こん時のことだけははっきり覚えてて。怖かった」

琴美「うん」

宗司「（笑って）当たり前なんですけどね。ほんと、怖かった」

琴美「だから会いたくないの？弟さんに」

宗司「いや、弟が怖いわけじゃないです」

琴美「？」

宗司「ただ死が怖い。それだけです。弟は何もわかってなかっただけだし」

琴美「何も？」

宗司「ね。ずっとそう思ってたんですけど、わかってたのかも。怖かったでしょうね、向こうも。相当」

琴美「うん。わかんないけど」

宗司「でもその後、ほんとに何もわかってない奴になっちゃった。いや、……にされちゃ

った、というか」

琴美「ん？」

宗司「琴美の視線から逃れるように自分の足元に目をやり、つま先で空き缶を転がしてみたりする。

宗司「その一件まで、母親、弟のこと溺愛してたんですけど、なんか途端に拒絶するようになったちゃって。言葉にはしないけど、その態度の端々に、まるで化け物に対するような感じがはつきり出でて。(軽く笑い)子供ん時ってそういうのに敏感だったじゃないですか？必要以上に」

琴美「うん」

宗司「だから余計になのかもしれないけど。

なんかもう、視線とかマジ見てらんなかった」

新しい缶ビールを開けて飲み始める宗司。
宗司「なんであんな目で自分の子供見れるんだろ」

琴美も新しい缶ビールを開けて飲み始める。
宗司「そういう状況がずっと続いて、弟、母親に甘えようとか、一切しなくなってる。なんか不感症みたいになって。俺も、年齢的なこともあるのかもしれないけど、母親と………つっつか家族皆と距離とってた。で、あいつが小学校に上がる時、どっちにしますか？って話になって」

琴美「どっち？」

宗司「あの、普通の学級と、特別学級？」

琴美「ああ……」
宗司「母親迷わず、後者で、って。その話持ちかけてきた人の方が、いやいやよく考えてくださいよ、集団の中で生活していくうちに変わっていくかもしれないませんか？って慌てちゃって(鼻で笑う)。でもパキッと。この子は普通じゃないので、って」

宗司「ビールを一気に流し込み、空き缶をゴミ箱に向かって投げる。

が、入らず、地面にカランと転がる。

琴美「……もうダメだったんだね」

宗司「ダメって？」

琴美「あるじゃない？女って。そういうの」
宗司「〃あるじゃない？”って……自分の子供っすよ？」
琴美「うん。それでも……多分。いや、わかんないけどね」
宗司「へー。やだな」
琴美「やだよ。やだよ。やだよだ」
琴美もビールを飲みきり、空き缶を投げる。
やはり外れる。
宗司、足元の空き缶を集めて立ち上がり、二人の外した缶も拾いゴミ箱に捨てる。

○精神科・病室（夜）

病室へ入ってくる光子。
宮子「光子……どこ行ってたの？お母さん、心配してたのよ。ずっと」
看護師の声「猪川さん、お薬の時間ですよ」
光子は看護師に変わる。
宮子「……」
薬を飲む宮子。

○宗司の部屋（夜）

窓から月明かりが射し込む部屋。
ベッドに琴美、床に宗司が横になっている。
琴美「ねえ、続きは？」
宗司「え？」
琴美「弟さんの話」
宗司「ああ。地元の小学校の特別学級に入ってた。でも数カ月でそういう専門の学校？に転校しました」
琴美「何かあったの？学校で」
宗司「や、家ん中の問題です。母親の態度があんまりだったの、父親も見えなくなっただんでしょ。ね。別れて、亘は俺が育てるって言って出てった。（笑って）出てく時、俺になんて言ったと思います？」
琴美「お母さんを頼むぞ、とか？」
宗司「（笑い）当たっちゃった。それっす。ありがちな。調子良過ぎませんか？それちよつと。俺が何にも感じてないとでも思ってたんです

かね」

琴美「あなたってずっとそういう感じ？」

宗司「え？」

琴美「妙にもものわかりがいいっていうか、諦めがいいというか。お父さん、あなたに甘えちゃったんじゃないかな。嫌だったら嫌だつて言えばよかったのに」

琴美、ベッドの上で駄々をこねる子供のよう
うに手足をバタバタ動かし、

琴美「“やだやだ！置いてかないでー”って」

宗司、何事だという目で琴美の方を見つつ、

宗司「えー：：いや：：」

琴美「まあわかるけど。それで“しようがないなあ”って与えられるようなものなんて望んでなかったんだよね。きつと」

宗司「いや、後ろめたさがあったんですよ。だから、あ、これ罰なのかな、みたいな？そういう諦めっすかね。あつたとしたら」

琴美「(宗司を覗き込み) 後ろめたさ？」

宗司「俺が悪かったんです。そもそも。あの時、決定的な何かを言ったのか、やっちゃったのかはわからないけど、それまで弟のこと虐めてばっかいたのは覚えてる。ものわかりのいい子なんかじゃ、全然なかったです。あいつ生まれてからの、お兄ちゃんだから的なあれがダメだったんでしょね。多分かなりエグイことしてた。小さい弟相手に」

琴美「(天井を見て) 誰にでもあることでしょ。」

そんなの」

宗司「そっすかね。でもそんな、その後になつと影響するようない、そこまでのことってないじゃないですか、普通」

琴美「：：」

宗司「あいつ、ほんとにまともな感情があつて、わかんないフリしてたんじゃないかなって時々思うんですよ。で、そのフリを今も続けてるんじゃないかって：：俺があいつの人
生狂わせたんです」

琴美「じゃ、お互い様だ。ね？」

宗司「え」

警官「それがですね……（言いよどむ）」

○同・遺体安置所（夜）

目の前の光景に唾然とする琴美。
視線の先、遺体にかけられたシート
の端から小さな足が二つ出ている。
死人のものとは思えない、白く透き通った
女兒の足だ。
琴美、その遺体に歩み寄り、そろりと顔の
布を捲る。
背後から声をかける警官。
警官「我々も信じられないのですが、お預か
りしていた光子さんの写真と酷似していたも
ので……」

琴美「遺体の顔を凝視したまま呟く。
琴美「少し、外してもらえますか？」

ドアを出る警官。

直後、遺体の目がぱつと開く。

光子「琴ちゃん」

と言つて無邪気に笑いだす。

琴美「……なんで？ねえ、なんでよ」

笑い続ける光子。

琴美「消えてつて。もう。お願いだから……」

しばしの沈黙の後、

琴美「消えてつて言ってるの！」

と右腕を大きく振り上げる。

手には子供用の赤い箸が一本握られている。

その腕を思いきり振り下ろす琴美。

蟬の断末魔のごとく奇声をあげる光子。

バタバタと暴れる小さな足。

何度も何度も振り下ろされる赤い箸。

いつの間にかドアの前に立ち、その後ろ姿

を見つめている信彦。

それに気づかず、何度も何度も、ただひた

すら腕を大きく上下させる琴美。

やがて、暴れていた小さな足がぴたりと動

かなくなり、みるみるうちに白骨化する。

信彦「琴美……」

振り返る琴美。

信彦「ああ、琴美……」

突如その場で泣き崩れる信彦。

恐る恐る歩み寄る琴美。

信彦の前にしゃがみ、

琴美「：：お父さん？」

顔をあげる信彦。

その顔は鬼と化していた。

鬼「助けて」

と琴美の首筋に手をかけようとする。

○宗司の部屋（夜明け前）

ベッドに宗司と琴美。

二人の距離は少しだけ縮まっており、宗司

の手が微かに琴美の首筋に触れている。

目を覚ます琴美。

宗司を起こさぬよう、そつとベッドから這

い出し、自分のカバンをあさる。

携帯を取り出し電源を入れると、留守電サ

ービスからのＣメールが何通も。

全て『父』からであった。

そこへまた『父』からの着信。

琴美、すぐにドアを出て隣の部屋へ移る。

ドアのすりガラス窓越しに、電話をしている

る琴美の姿が見える。

琴美の声「もしもし」

ベッドには目を瞑ったままの宗司。

○同・キッチン（夜明け前）

外から鳥の声などが聞こえている。

電話をしている琴美。

信彦の声「ああ、琴美か？ごめんな、こんな

時間に」

琴美「んーん。どうしたの？」

信彦の声「少し声が掠れる（おばあちゃんな、

亡くなったんだ。二時間くらい前に」

琴美「：：ごめん」

信彦の声「や、いいんだ、しょうがない」

琴美「：：」

信彦の声「琴美？大丈夫か？」

琴美「うん。私は」

信彦の声「家にも何度か電話したんだけど、

外か？お母さんは？」

琴美「私はちよつと、今日は外で……お母さんは入院してるの、今」

信彦の声「何かあったのか？」

琴美「んーん、体が悪いわけじゃなくて……」

信彦の声「……：：：そうか。すまなかつたな……」

お前一人に負担かけて」

琴美「……：：：お通夜、今日？」

信彦の声「ああ。できれば。病院からさつそ

く葬儀屋リスト貰ったしな。死人はさつさと

出てけと言わんばかりだよ」

琴美「そう」

信彦の声「琴美、仕事休めるか？何日か」

琴美「忌引きとるよ」

信彦の声「悪いんだけど、通夜と葬式、手伝

つてもらえないかな？俺一人じゃ、ちよつと

心細くて」

琴美「うん。私いてもあんまり変わんないか

もしれないけど、早めにそっち行くね」

信彦の声「ああ。ありがとう。助かるよ」

○同（早朝）

自分の服に着替えた琴美。

ベッドで眠っている宗司。

よれた襟口から傷跡が覗いている。

朝の青い光で、抉れた皮膚に陰影がついて

いる。

琴美、しばしそれを見つめた後、触れよう

としてやめる。

× ×

玄関のドアが閉まる。

宗司、目を開ける。

○走る電車の中（朝）

座っている琴美。

頭上の網棚には旅行用カバンが。

○猪川家・本家

平屋建ての古く大きな家屋。

タクシーを降り、門へ向かって歩いて来る

琴美。
葬儀屋の人たちが慌ただしく通夜会場のセ
ッティングなどをしている。
玄関を入り、旅行用カバンを隅に置く琴美。
ふいに角の傘立ての中に、大人用の傘に埋
もれるようにして子供用の赤い傘が立てら
れていることに気づく。色褪せ、埃を被り、
蜘蛛の巣なども絡みついている。
琴美、家にながりがり、業者の人に軽く挨拶な
どしながら信彦の姿を探す。
開け放たれたいくつかの襖を抜け、閉めら
れている一番奥の部屋の襖を開ける。

○同・和室

障子越しのやわらかな光に満たされた室内。
真ん中にぼつんと白い布団。
顔に薄い布を被せられたキヨの遺体が横た
えられている。
琴美、静かに傍らに座り、布を捲る。
瞼や頬の皮が骨の間に深く落ち込んだキヨ
の顔。まだ塗られたばかりと思しき白粉や
口紅は既に分裂し剥がれだしている。
琴美、そつと布団の中に手を滑り込ませ、
キヨの手を探る。
と、何かに触れ、反射的に手を引く。
少し布団を捲って確認すると、キヨの体の
周りには四角いドライアイスの塊が敷き詰
められていた。
くすんだキヨの腕の傍らで白い煙が上がる。
布団を整える琴美。
と、そこへ目的もなくうろつくような足音
とともに信彦の声が聞こえてくる。
障子の向こうの縁側の方からである。
信彦の声「ああ。反応が出た。医者は原因不
明で片付けてたけど、それしか考えられない」
立ち上がり静かに障子の方へ歩み寄る琴美。

○同・縁側

電話をしている信彦。
信彦「そうだよ。研究しだした当初からだか

ら、もう30年近く……親父が変な死に方してからもお袋ずっと気丈に振る舞ってたんだけど、俺が結婚した頃からだったかな、ガクツと不安定になって。見てられなかった……（鼻で笑い）仕方ないってこたないだろ。下手な慰めよせよ……あ、いや、すまない。それに、投与し続けたのはお袋の苦痛を和らげるためだけじゃない。ある種の快楽だったんだ、俺にとつて。あの薬が確かに作用してるのを、この目で観察できることが」

○同・和室

琴美、キヨの顔を見下ろす。

しゃがんで薄い布を被せる。

信彦の声「どうかしてたじゃ済まされないだろう……引き留めてくれるのは嬉しいが……いや、終わってないよ、まだ。お袋一人じゃ、や、すまない、なんでもない……ああ」

障子戸に手がかけられる。

咄嗟に逃げるようにして部屋を出る琴美。

静かに襖が閉まるのと同時に障子戸が開く。

逆光を背に、キヨの遺体を見下ろす信彦。

信彦「ありがとう。悪いな。待ってるよ」

と電話を切る。

○出版社・外・非常階段

タバコを吸っている宗司と川島。

川島「そういえばどう？猪川琴美は？」

宗司「え？ああ。なんか俺の読みが違ってたっぽい。ふっーの人だわ。やってないね、あれは。全然」

と畳み掛けるように言うと、まだ長いタバ

コの火を消し、中へ入ろうとする。

川島「なあ、」

振り返る宗司。

川島「異動願出したんだって？」

宗司「ああ……」

川島「どういうつもりだよ？」

宗司「いや、ふとさ、あってもなくてもいいような記事書いて、あんま人に害のないよう

に生きてくのがいいかなとか思っちゃって」
川島「（鼻で笑って）傲慢だな」
宗司「……そうだね。そうかもしれない」
背を向け、中へ入る。
残された川島、タバコの火を消す。
遠くで雷鳴がしている。

○切通

雷が鳴り、今にも降り出しそうな空の下、
坂を上って来る琴美。
切通に近づくほどに雷鳴が大きくなる。
『落石注意』の看板が掲げられたフェンス
の前で立ち止まる琴美。
雨が降りだす。
琴美、フェンスに沿って移動し、傾斜にな
った茂みの中へ踏み入る。
木々の間を抜け、雑草をかき分け奥へ進む。
フェンスは切通を包囲するようにして茂み
の中にも続いていたが、一部金網が破られ、
大人が一人ギリギリくぐり抜けられるくら
いの穴が空いていた。
× × ×
激しさを増す雨。
フェンスと切通の間の地面にみるみる水溜
りができていく。
斜面の茂みから下りてくる琴美。
そのまま切通の中へ避難する。
× × ×
タバコを取り出し、火をつける琴美。
切通内を妙な風が吹き抜ける。
タバコの煙が入ってきた方へ流れる。
そちらを見る琴美。
視線の先には大きな水溜りがある。
水面に、波紋で歪んだ二人の少女の顔。
今、琴美の目にも二人の少女が映っている。
一つの赤い傘の下、じゃれ合いながら水溜
りを覗き込む姉妹。一人は赤いワンピース、
もう一人は白いワンピースを纏っている。
幼き日の光子と琴美である。
赤い服の光子、白い服の琴美の頭を押さえ

つけるようにして
光子「ほら琴ちゃん、練習。お水にお顔浸ける練習」
琴美「いい、いい。お風呂でやる」
光子「ダメだよ、お風呂じゃ。お湯だもん」
光子、傘を離し、両手で琴美の頭を水溜りに近づけようとする。
琴美「いいい。いいい」
必死で抵抗する琴美。
微かに笑っている光子。
琴美、バランスを崩し、地面に手をつく。
右手がごつごつした大きめの石に触れる。
キャッキヤと声をあげて笑いだす光子。
琴美の手が力強く石を掴む。
琴美「やーだ！」
その叫び声とともに、ゴツツと鈍い音を立てて光子の側頭部に石が直撃。
その瞬間、光子の笑い声はパタリと止み、体がバチャツとぬかるんだ地面に倒れ込む。
水溜りのすぐ近くに光子の顔がある。
琴美の白いワンピースには一部赤いシミが。その様子を切通の中から呆然と見ている現在の琴美。
タバコの先端の灰がずいぶんと長くなっている。
光子、朦朧とした表情で幼い琴美を見上げ、何か呟く。
その声は、切通の中の琴美には届かない。幼い琴美、その言葉を聞くなり、光子の頭を押さえ込み、顔を水溜りに浸ける。
蝉の断末魔のような奇声をあげ、バタバタと暴れる光子。
やがて、動かなくなる。
琴美は鼻血を垂らして尻餅をつく。
白いワンピースに新たな赤いシミができる。
切通の中の琴美。短くなつたタバコの火が指に迫り、その熱に驚いて振り払う。
小さな赤い火が湿気を帯びた地面に落ち、一瞬にしてジュツと消え、白い煙を上げる。
それに気を取られて一瞬目を逸らした隙に、

幼い姉妹の姿は消え、大きな水溜りだけに
なっていた。

×
琴美、しばし呆然としていたが、突如吐き
×
気を催す。
姉妹がいた水溜りの側とは反対の道へ抜け、
茂みに向かって嘔吐する。

○猪川家・本家（夕方）

雨上がりの夕景の中、門をくぐる琴美。

玄関を入ると、すぐ隣の居間から喪服姿の
信彦が顔を出す。

信彦「おお、遅かったな。心配したぞ」

琴美「……」

信彦、琴美の濡れた髪や服を見て、

信彦「どうした？タクシーじゃなかったの
か？」

琴美「着替えたらず伝うから」

玄関の隅に置かれた一切濡れていない旅行

用カバンを持って家へ上がる。

信彦、琴美の動きを目で追い、

信彦「……おばあちゃん、一番奥の部屋にい
るから、挨拶してやって」

琴美「うん」

○同・和室（夜）

通夜が行われている。

一番奥の和室にキヨの遺体と祭壇。

手前側の和室に木目のある長いテーブルが
置かれ、参列者に料理などが振る舞われて

いる。

喪服姿の峰子、宏の姿もある。

ビールを注いで回る琴美。

手洗いに立つ峰子。

片足を引きずって歩きだす。

立ち上がるうとする宏を制し、琴美が付き
添う。

○同・廊下（夜）

廊下の一番奥にトイレがある。

所々軋む床を一步ずつ進む峰子と琴美。
峰子「琴ちゃん、いい人とかいないの？」
琴美「（笑って首を傾げ）どうですかねえ」
峰子「あなたはちゃんと前見て幸せにならな
きゃダメよ？過去のことは過去のこと。ね？」
琴美「……ええ」
長い廊下を歩き続ける二人。

○同・玄關（夜）

参列者を見送る信彦と琴美。

○同・台所（夜）

来客用の食器などを洗う琴美。
終えて、冷蔵庫を開ける。
アルコールフリーのビールが並んでいる。
琴美、奥から普通のビールを取り出し、コ
ップを二つ持って台所を出る。

○同・和室（夜）

キヨの遺体の手前に長い蠟燭が立てられて
いる。
テーブルの片づけなどをしている信彦。
片手に台拭きを握っている。

部屋に入って来る琴美。
瓶ビール一本とコップ二つを持っている。

琴美「いいよ。あとで私やるから」

信彦「や、いいよ」

琴美「いいから、ちよつと休も？」

と信彦の手から台拭きを奪い、コップを差
し出す。

琴美「はい」

信彦「あ、いや俺は……ああ、もういいのか」
と軽く笑い、コップを受け取る。

琴美「？」

信彦「いやほら、ここんとこ、いつ病院から
呼び出しあるかわかんなかったから」

信彦のコップにビールを注ぐ琴美。

信彦、肩の荷が下りたような表情で溜め息
をつき、ビールを一口飲む。

が、すぐにコップを置き、立ち上がる。

琴美「どうしたの？」
信彦「や、ちよつと風に当たりたくなくて」
琴美「待って、聞きたいことがあるんだけど」
信彦「……ごめんな。今は疲れてる」
琴美「大事なことなの」
信彦「蠟燭番、頼むよ」

と背を向ける信彦。
琴美「待ってよ、お父さん」
振り返らず、部屋を出て行く信彦。

×

×

×

蠟燭の火をじっと見る琴美。
祭壇の両サイドで回る灯籠。

赤や青や黄色の光が、複雑に混じり合い、

琴美の顔に反射している。

揺らぐ蠟燭の炎。

琴美「(ぼつりと)ごめんね」

蠟燭の上で手を振って火を消す。

○切通(夜)

切通を挟んで奥側のフェンスの先に、遠ざかる男の影と懐中電灯の明かりが見える。その光が闇に消え入るほどになると、今度は切通手前側のフェンスの前で明かりが灯され、女の影が浮き上がる。女の影は、すぐに道の横の茂みに消える。完全な闇と化した空洞から、風が吹き抜ける嫌な音だけが聞こえる。やがて茂みから小さな明かりが下りてきて、その闇の中を進んでいく。

○墓地の中の道(夜)

両側に墓地がある道。
その辺りだけ木々が伐採され、月明かりに照らされている。
道の奥から近づいてくる懐中電灯の光。
ふいに止まり、その明かりが消え、直後にぼんやりと青白い光が灯る。
月明かりの下に出ると、それが琴美であることがわかる。
携帯の画面から発せられる弱い光で足元を

照らすようにして静かに歩く琴美。
あるところで立ち止まり、墓地に目をやる。
視線の先には、猪川家代々の墓の前に蹲っ
ている信彦の姿が。
そちらからキュウキュウと奇妙な音が聞こ
えてくる。

○墓地（夜）

墓の前に膝をついてしゃがんでいる信彦。
墓石手前の石板がずらされている。
地下に広がる四角い納骨スペース。
その穴に片腕を入れ、何かしている信彦。
穴の縁には、ボロボロの布きれのようなも
のが掛けられている。
やたらと広い納骨スペースの中。
ずらりと並べられた骨壺に紛れて、ごつご
つした大きめの石も一つ入っている。
骨壺の蓋がいくつか外されている。
年季の入った腕時計をした信彦の手が、そ
のうち一つの骨壺に何かを押し詰めている。
腐敗してくすんだ、子供のか細い骨である。
信彦の息の音と、秒針の音が響いている。

○墓地の中の道／墓地（夜）

呆然と立ち尽くす琴美。
そこへ携帯のバイブ音が。宗司からの着信。
気づいて振り向く信彦。
納骨スペースの縁に置かれたボロボロの布
きれをさっと穴へ戻す。

琴美「お父さん」

信彦「蠟燭番、頼んだろう？」

平静を装い、石板を動かそうとする信彦。
が、手が震えてまるで力が入らず、石板は
ビクともしない。

琴美、そろそろと歩み寄りながら、

琴美「もういいよ、隠さなくて」

信彦「（無理に笑いながら）帰りなさい、大丈
夫だから」

琴美「何がよ？ねえ、もういいって」

信彦「（振り向き、怒鳴って）帰れと言ってる

んだ！（眩くように）家が火事になる」
琴美「消してきたよ、火なら……。ねえ、お父さん、」

さらに歩み寄る琴美。

信彦「来ないでくれ、頼むよ……。」

琴美「私の服……。白かった？」

信彦「頼む、やめてくれ。やめよう？ な、琴美。父さん何も見てない。何もなかったんだ。なあ？ そうだろ？ そうなんだよ。うん、そうだ、ああ、そうだよ……。（自分に言い聞かせるようにブツブツと呟き続ける）」

琴美「……。私を見たよ。全部ちゃんと見た。

ごめんね。もういいから」

信彦「何言ってるんだよ！ だからお前は何も（やってない）」

琴美「（被せて）受け入れてよ！……。受け入れないと、ここからずっと出られない」

○墓地（夜）

信彦の隣にしゃがんでいる琴美。

信彦、穴に目を落としたまま、

信彦「父さんな、あの日、お姉ちゃんのことも、お前のことも、まるで物のように扱った」

琴美「え？」

信彦「俺はほんとに見てなくて……。ただ、状況が限りなくただ一つの可能性を示していた。可能性じゃないよな……。（震えた声で）事実、だ」

琴美「……。私がお姉（ちゃんを）」

信彦「（遮り）言わなくていい。いや、聞きたくないんだよ、俺が。あの時もそうやって事実から逃れようとして、光子と、証拠になるもの全てをここへ押し込んだ。それから」

琴美を見る信彦。

まっすぐ見返す琴美。

目を逸らす信彦。

信彦「お前に、致死量に近い、いや、それを上回る量の薬物を投与した。俺が当時、ストレス障害なんかの患者に用いる為という名目で研究していた、人間の記憶を制御する薬だ」

琴美「：：」
信彦「通常は継続的に投与する必要があるんだが、まだ幼かったお前にとって強烈なシヨックというのがおそらくその一点だけだった。だから、直後の大量投与で記憶を完全に消し去ることが可能なんじゃないかと考えた」
信彦「穴から布きれを取り出しながら、信彦「事実はお前しか知らない。お前の記憶さえ消せば、事実そのものがなかったことになる。父さんは：（失笑し）俺は、俺自身のためにそうしたんだ。お前の記憶を、いや、或いは、お前自体を消してでも、事実から逃れようとした。恐ろしいよな。人間のすることじゃない：：すまなかった、本当に」
琴美「いいよ、もう。いい。ごめんね。辛い思いさせちゃったよね」
信彦「そんなこと言うなよ。責めてくれよ」
琴美「私に人を責める資格なんかないよね」
琴美「ごつごつした石を穴から取り出す。信彦、その手元をじっと見ている。また琴美の携帯が鳴る。宗司からである。電源ごと落とす琴美。信彦「いいのか？」
琴美「うん。：：いっそ、ほんとに私ごと消すか、（投げやりに笑い）この頭、ダメにしちやってくれたら楽だったのに」
石を握る琴美の手に力がこもる。
信彦「心配そうに琴美の横顔を見る。琴美「皮肉なもんだよね。裁かれないのが、一番辛い」
信彦「仕方ないんだよ。お前はまだ小さくて何もわかってなかったんだから。俺が目を離したのがいけなかった」
琴美「ごつごつした石をさらにぐっと握りしめる。指の間に、微かに血が滲む。琴美、石から手を離し、どこかおぞましい笑みを浮かべる。琴美「思い出したのは事実だけじゃなかった。本当に私しか知らないことも、まるで今：：」

（自分の喉元を軽く締め付けるようにして）
今この自分の中から湧き上がってくるみたい
に蘇って……」

月明かりに照らされる琴美の首筋と、それ
に絡み付いた手。

信彦「……琴美」

と琴美の首筋を掴み、首にかけている手を
下ろさせる。

琴美の白い首筋に血の痕が残る。

琴美「ごめん。戻ろう。おばあちゃん、待っ
てるね」

×
力を合わせ、石板を元に戻す二人。
×

○猪川家・本家

告別式が行われている。

忙しく動き回る琴美。

来る人来る人に頭を下げる信彦。

押田と松澤製菓社長（68）が訪れる。

二人「この度は」
頭を下げる。

社長「聞いたけど、何？辞めるって急に……
わざわざ今辞めなかったって。（押田に）なあ？」

信彦も押田を見る。

目を逸らす押田。

社長「あと一年もすりゃ定年だろう？希望し
て残るなら別だけでも」

信彦「ええ、そうなんですが」

社長「いや、当然残ってくれるものだと思っ
てたんだよ？とにかく今は疲れてるんだろう。

少し休んでさ、考え直してよ？ね」

と信彦の背中を叩く。

○火葬場・外

煙突から、白い煙が上がっている。

○同・拾骨室

琴美の箸と信彦の箸で骨壺へ移される大き
めの骨。

他の親戚らも順に同様の行為を繰り返す。

箸で運ばれる骨は次第に小さいものになる。
職員が短い箒と塵取りを使い、手際よく残
った骨や灰を集めて骨壺へ流し込む。
骨壺に骨を押し詰める職員の手。
じつと見る琴美。目を瞑る信彦。

○切通

切通を挟んで家とは反対側の道。
こちらのフェンスにもやはり過剰に『落石
注意』の看板が掲げられている。
マイククロバスが現れ、フェンスの数メートル
手前で停止する。
車を降りる喪服姿の人々。
先頭に位牌を持った信彦、続いて骨壺を抱
えた琴美、その他ぞろぞろと続く。
片足を引きずる峰子、フェンスを見て、
峰子「ここを通れたら、本家からすぐなのに
ねえ」

×
黒い葬列、切通とは逆方向へ進む。
×

○猪川家・本家

参列者を見送る信彦と琴美。

○同・庭（夕方）

縁側に腰掛けている琴美。
庭先にアルミの丸ダライが置かれている。
その傍らに大きめのごつごつした石が一つ。
琴美に背を向けるようにしてタライの前に
しゃがみ込み、ライターを点ける信彦。
タライの中には朽ちた赤い布きれと、所々
濃いシミのついたボロボロの白い布きれが。
火がつくと、赤い布きれも白い布きれも、
あっけなく同じ黒い灰になっていく。

信彦「背を向けたまま」ごめんな。俺、楽にな
った」

琴美、黙ってじつと背を見つめたまま。
信彦「（尚も振り向かず）ごめんな」

琴美、タライから上がる炎を見る。

信彦、振り返り琴美を見る。

目を合わせようとせず、炎を見続ける琴美。

信彦も再び背を向けて炎を見る。

布きれを燃やし尽くして弱くなっていく炎。

信彦「(また背を向けたまま)いつからわかってた？」

琴美、信彦の背に視線を戻す。

琴美「いつって……」

信彦「(琴美の答えを待たず)や、いい。いいんだよな、もう。(振り返り、畳み掛けるように)よそう。この話は今日限りだ」

タライの中の火が完全に消え、黒い灰だけになる。

傍らの石を手に取り、立ち上がる信彦。

琴美「お父さん、」

信彦「(何か言おうとする琴美を遮り)もう少し、付き合ってくれるか」

○切通(夕方)

切通の中を歩く信彦と琴美。

信彦の手には例の石が握られている。

信彦、それを見つめながら、

信彦「お前のことを恐ろしいと思ったことは一度だってないよ。俺にとっては、光子も琴美も天使だ(少し照れくさそうに笑う)。今お前、二十……」

琴美「九。来年には三十」

信彦「そうか。三十になっても、四十になっても、五十になっても、お前は天使だ」

琴美「(笑って)酔ってるの？」

信彦「そんなに飲んじやいないよ。あの時お前は、ただ何もわかってなかったんだよな、本当に。それだけのことだ」

切通を抜けた二人。

信彦の顔には陽の光が注ぎ、琴美の顔には木の葉の影が揺れている。

切通とフェンスの間で立ち止まり、振り返る信彦。

琴美も立ち止まり、振り返る。

信彦、手にしていた石を、切通の上を目がけて思いきり投げる。石は切通上の木々の中へと消えた。

信彦、晴れ晴れとした表情。

信彦「戻ろうか」

歩きだす信彦。

琴美、その場に留まり、石の消えた辺りを呆然と見上げている。

信彦「琴美」

琴美、信彦について歩きだす。

再び切通の中へ。

信彦「しばらく居られるんだろ？」

琴美「んーん。今日帰る。お母さん心配だし」

信彦「そうか：：ごめんな」

琴美、黙って歩き続ける。

○ 走る電車の中（日没直後）

人の疎らな電車内。

窓の外には日没直後の景色。濃い赤紫色。

琴美の乗っている車両には他に、赤い顔で上を向き大口を開けて眠る老人が一人だけ。

床にはチューハイの空き缶が。電車の揺れに合わせてカラカラと転がっている。

窓ガラスに曖昧に映る琴美の顔。

琴美「（小さく呟く）天使」

痛々しくて思わず笑えてくる。

むき出しの八重歯。

窓に映る琴美の顔が鬼と化す。

目を覚ます真っ赤な顔の老人。

ぎよつと琴美を見る。

○ 水族館・イルカの水槽前
往診を終えた澤井。見送る根本。

○ 同・クラゲコーナー

平日昼間の人の少ないクラゲコーナー。

幻想的な光景の中に宗司の姿がある。

青い光を肌にうけ、ある水槽の中を見つめている。

その背後から澤井が現れ、

澤井「面白いですよね」

宗司「少しビクツとして振り向く。

澤井「クラゲ」

宗司「（水槽の方を向き直り）はい」

澤井「週刊誌の記者の方ですよね？猪川さんのこと取材してた」

宗司「（また澤井の方を向き）……そうですが」

澤井「読みましたよ、あの記事」

宗司「ああ、どうも……」

澤井「なんだかあっさりしてましたよね。ずいぶん遠慮がちというか」

宗司「ですかね」

澤井を避けようと別の水槽の方へ移動する。

ついて歩く澤井。

澤井「そのわりに相変わらずしつこくうるついで」

一つの水槽の前で止まる二人。

澤井「何かあるんですか？まだ。彼女しばらく休んでるみたいだけど」

宗司「別に何もありませんよ。これ見に来ただけです」

澤井「そう。好き？」

宗司「は？」

澤井「これ（とクラゲの水槽を顎で示す）」

宗司「まあ」

澤井「へえ。どういうところが？」

宗司「どういう……気楽そうな感じとか」

澤井「気楽そう（笑う）。じゃあこの中は、皆、互いに干渉し合うことのない、自由で平和な

世界ってとこですかね？」

宗司「やや睨むように澤井を見る。

澤井「気にせず、

澤井「でも共食いなんかもあるんですよ？」

宗司「え」

澤井「それが、なかなか興味深いものでして」

澤井「人差し指を立てる。

腕には年季の入った時計をしている。

澤井「例えば（水槽の中の一匹のクラゲを指さし）これが――」

宗司「ガラスに突き立てられた澤井の指先

を見て、少し緊張した表情で唾を飲む。
澤井「気づくが、話を続ける。」
澤井「―これが今、仮に物凄い飢餓状態にある、或いは、他者を傷つけたいという強烈な衝動に駆られているとしたら、どれを狙うと（思います？）」
宗司「（被せて）他者を？こいつにそんな認識があるんですか？」
澤井「さあ。わかりませんね。私、クラゲじやありませんから。でも、これ自体にそんな認識があるうがな、これが、これと、これでもないものが存在しているのは事実ですよ。」
宗司「：：」
澤井「そうでしょう？見ればわかることだ。で、どれを狙うと思われませんか？」
澤井の指の先には、もはや先程のものとは別のクラゲがいる。
宗司「さあ。自分もクラゲじゃないんで」
澤井「歩きだし宗司から離れる。」
目で追う宗司。
ある水槽の前で立ち止まる澤井。
澤井「目の前の水槽のガラスに人差し指を突き立て」これ「
宗司「は？」
澤井「いや、（歩いてまた別の水槽の前へ行き、人差し指を立てて）これかな。や、（少し指先を滑らせ）これかもしれない。まあ、ここが広い一つの水槽の中だとしたら話ですが」
宗司の方へ歩み寄りながら、
澤井「自然の法則なんだそうですね」
再び宗司の横に並ぶ澤井。
澤井「できるだけ自分から遠いものを狙う。（また人差し指を水槽のガラス面に突き立て移動させながら）これやこれ」
澤井「カバンを床に置き、左手の人差し指を使い水槽の別の側面からもクラゲを指す。」
澤井「それにこれやこれ」
葉指の指輪が、コツツとガラスに当たる。
それに目が行く宗司。クラゲは無反応。
澤井「失礼。（左の人差し指をピンと突き立て

移動させ）これやこれ、でないものを狙うわけです。（笑って）私が初めに指したものかもしれませんね。これは」
宗司「どうして」

○猪川家

妊娠検査薬を見つめる琴美。
この映像に澤井の声が重なる。
澤井の声「近くのものと同じポリプから生じたクローンである可能性が高いからではないかと考えられています」

○水族館・クラゲコーナー

澤井、ガラスから指先を離し、宗司の方へ向けようとすが、すぐに下ろす。
澤井「自他の認識があるうがなかるうが、近くの者を傷つけることは自己を傷めつける行為に等しいのだと、どこかでわかっているのでしょうか」

澤井、宗司に人差し指の先を向ける。
宗司、思わずバツとその手を振り払う。
澤井、一瞬驚くが、余裕を示すように微笑かに笑って話を続ける。

澤井「なるたけ遠くの、絶対的他者を傷つける―それが自然の法則だというなら、ある意味、我々が時に近い者に対して行うような憎悪に基づく攻撃よりも、よほど質の悪いものだと思いますか？」

宗司、澤井から目を逸らし、水槽を見る。
澤井の携帯が鳴る。『猪川さん』からの着信。

電源ボタンを押し、応答保留にする澤井。
澤井「私やあなたには少なからず理性がある。

その自然の法則に抗うことができるわけです」
澤井の携帯から琴美の声が漏れ聞こえる。
琴美の声「これ聞いたら連絡ください。相談したいことがあります」

ツーツーという音が続く。

宗司「…：何が言いたいんです？」

澤井「彼女じゃなくてもいいなら、もうそっとしておいてやって来てくれませんか？」

宗司「別に俺、何も」
澤井「何も？君がうろつくようになってから
彼女はおかしくなった」

宗司「だから（何も）」

言い返そうとする宗司を遮り、
澤井「何もしなくたって、存在そのものが害
にもなりうる。無自覚なはずがないだろう」
去ろうとする澤井。

宗司「……でも、近かろうが遠かろうが、人
を傷つければ傷つきますよ、多少。自分も」

澤井「……」

宗司「そうですね？理性、あるから」

澤井「その痛みでもって自分の存在価値を量
ってるわけだろ？君のその、理性は」

宗司「……」

澤井「（ボソツと）悪趣味だね」

去っていく澤井。

我関せずとばかりに悠々と泳ぐクラゲたち。

○精神科・病室

穏やかに眠る宮子を見下ろし呟く琴美。

琴美「お母さん。どうしたらいいかな、私」

ドアが開く。振り向く琴美。

血圧計を持って看護師が入ってくる。

看護師「おやすみですかね？」

琴美「ええ」

看護師「もうちょっと後にしましょうか」

琴美「すみません」

看護師「いいえ。（琴美の傍へ来て宮子を見下
ろし）最近はずいぶん落ち着いてらっしゃい
ますよ、お母さん」

琴美「そうですね。ありがとうございます。

よかった（と母親を見つめる）」

看護師「猪川さん？」

琴美「？」

看護師「少しお疲れなんじゃないですか？」

琴美「私ですか？」

看護師「ええ。ちよつと顔色が……」

琴美「そうですね」

看護師「おうちでゆっくり休んでください。

お母さんのことは私たちがちゃんと見てますから」

宮子「目が覚めます。」

宮子「あら、光子。また来てくれたの（と微笑む）」

琴美「……」

看護師「猪川さん、琴美さんじゃないですか」

宮子「ああ（無表情に）」

看護師、琴美の背に手を添え、病室の外へ促す。

○同・廊下

静かにドアを閉める看護師。

看護師「もし必要そうでしたら、帰りにちょっと診察を受けていただければ、すぐに睡眠薬など処方できると思いますので。無理なさらずに」

琴美「……ええ」

○薬局・外

薬の入った少し厚みのある紙袋をカバンの奥にしまう琴美。

○産婦人科医院・外

入っていく琴美。

○同・待合室

妊婦たちをぼーっと眺めている琴美。

中でも一際大きな腹の妊婦の横で、二歳くらい

の少女が駄々をこねている。

女「よしなさい。もうすぐお姉ちゃんなんだから。ね？」

少女「やー！」

と言つて母親の腹を叩く。

女「その手をパシんと払いのけ、泣く少女。自分の腹をさする女。」

○同・診察室

医師と向き合つて座っている琴美。

医師「おめでとうございます。六週目です」
琴美「……（無表情）」
医師「（察して）まあ、色々ご事情もあるでしょうからよくお考えください」
琴美「……無理です。母親にはなれないです」
医師「不安なのは皆さん同じですよ。なる前からなれると思っっている人の方が少ないんじゃないですか」
琴美「……なんで私（声を詰まらせる）」
医師「とにかく落ち着いてじっくり考えてください。ひと月ほどを目安に納得のいく答えを出してください。できれば結構ですから」

琴美、カバンを持って立ち上がろうとする。
が、何か思い出したように、

琴美「あの」

医師「はい」

琴美「眠れないんです。そういう薬ってやっぱり……」

医師「そうですね。できれば避けた方がいいでしょう。胎児への影響は否定できません。まあ、どうしてもという場合には、少なめの量で十分気をつけて服用していただければ」
琴美「わかりました」

立ち上がる琴美。

医師「誤った飲み方をすれば、後々猪川さんがお母さんになろうと決意なさっても、流産をしたり、奇形児が生まれたりする可能性を高めてしまいますから」

琴美「……」

医師「いいですね？あなた一人の体ではないんですよ」

琴美「……失礼します」

診察室を出て行く。

○同・外（夕方）

出てくる琴美。ふらふらと歩きだす。

携帯が鳴る。澤井からの着信。

無視して歩き続ける琴美。

○猪川家・風呂（夜）

ぼーっと湯船に浸かっている琴美。
固定電話の呼鈴が鳴りだす。
その音から逃れようと、湯に顔をつける。
水面にぶわーっと髪が広がる。
鳴り続ける電話。
死んだようにじっとして動かない琴美。
黒い髪だけがゆらゆらと不穩に揺れている。

○同・リビング（夜）

留守電を再生する琴美。
看護師の声「小森医院の桑野です。えー、大変申し訳ございません。一時間ほど前から宮子さんの姿が院内に見当たりません。こちらメッセーজをお聞きになりましたら、折り返しご連絡いただけますでしょうか」

○同・外（夜）

濡れた髪のまま出て行く琴美。

○病院（夜）

必死で頭を下げる看護師。
看護師「申し訳ありません」
医師も頭を下げ、
医師「本当に……あの、お心当たりなどはありませんかね？」

○神社（夜）

祭で賑わう境内。
いくつもの松明の火が躍っている。
琴美、人ごみの中、宮子の姿を探す。
やがて、パジャマ姿で徘徊する母を見つけ、

その腕を掴む。

琴美「お母さん」

宮子の腕を引き、人ごみの外へ出る。

宮子「光子？」

琴美、腕を離し、宮子の目を見る。

琴美「……（次第に目が赤らんでいく）」

宮子「ああ、ごめんね。お母さん、混乱しちゃって」

と琴美の体に触れる宮子。

避ける琴美。

宮子「……琴美」

すがるように琴美の腕を掴む宮子。

琴美「イヤ（思わず小さく出てしまった悲鳴）」

宮子の手を振り払い、離れる琴美。

両腕で自分を抱え込もうにして固まる。

宮子、しばし困惑の目で琴美を見つめる。

宮子「ごめんね……琴美」

と再びそろそろと琴美に触れようとする。

琴美、触れるか触れないかというところで、

その手を思いきり払いのけ、

琴美「私が殺したの！」

ぎよつと振り向く人々。

さほど驚くでもなく、ただじっと見る宮子。

琴美「……殺したの。私が。あなたの大事な

娘を」

何も言わず、琴美を抱きしめる宮子。

そのまましばし髪を撫でた後、

宮子「帰ろうか。うちへ」

宮子、さらに力強く琴美の体を抱きしめ、

宮子「あんたは消えないで」

体を強張らせている琴美。

目には複数の小さな松明の火が揺れている。

その中の一つが上下左右に大きく揺れなが

らこちらへ近づいてくる。

その松明を持っているのは、よく見ると鬼

の面をつけた女のようなのである。

琴美を抱きしめる宮子の腕に、いつそうの

力がこもる。

無表情の琴美。目の中の炎だけが躍るよう

に揺れながら徐々に大きくなる。

それと反比例するように、祭囃子の音は次

第に遠のき、小さくなっていく。

鬼の面の女は、何やら奇怪な舞を舞うよう

にしながらどんだん近づいてくる。

女が琴美のすぐ目の前まで来ると、祭囃子

の音が完全に消え入る。

と同時に、鬼の面が液化して皮膚に染み入

るように消え、その下の顔が露わになる。

琴美の顔であった。

無表情から一変、邪悪に笑う女。

声はない。八重歯がむき出しになっている。表情を除いては人間のものであるその顔とは対照的に、手足は奇妙な形をしており、関節の動きなども異様で先が読めない。

女は突如、手にしていた松明をブンと振る。その火が宮子の側頭部を直撃し、一瞬にして頭部全体が燃え上がる。

琴美、宮子を突き放し、その場で嘔吐する。直後、祭囃子の音、賑わう人々の声が戻る。

宮子「……琴美？」

顔を上げる琴美。

心配そうに琴美を見ている宮子。

その頭部に何ら異常は見られない。

複数の松明の火が遠くに揺れている。

琴美「（微かに笑い、呟く）無理だ。もう」

力なく立ち上がる琴美。

手を添えようとする宮子。

さりげなく拒絶する琴美。

琴美、口の周りを手で拭いながら涙目で微笑み、

琴美「病院戻ろう？先生たち心配してる」

ふらつきながら石段を下りていく琴美。

しばしその背を見つめる宮子。

○精神科・病院（夜）

注射を打たれている宮子。

○同・廊下（夜）

医師と看護師、琴美が病室のドア前にいる。

医師「もう心配ありませんから。本当にすみ

ませんでした」

琴美「いえ、こちらこそご迷惑をおかけして」

○同・病室（夜）

すやすやと眠る宮子。

○猪川家・琴美の部屋（夜）

眠れない琴美。

○猪川家・外（明け方）

家を出て道を歩きだす琴美。
その足取りは夢遊病者のよう。

○駅のホーム（朝）

曇天の朝。

ある駅の下りホームに立つ琴美。
反対側のホームには通勤・通学客がいくつもの列をなしている。

携帯のバイブ音。宗司からの着信。

琴美、出る。

琴美「はい」

宗司の声「やっと出た」

琴美「しつこいよ」

宗司の声「：：心配だったんで」

琴美「心配？」

駅のアナウンス放送が重なり、しばらく電
話の会話が聞こえなくなる。

アナウンス「まもなく2番線に各駅停車○
行きが参ります。危険ですから黄色い線の内
側まで下がってお待ちください」

琴美「疑ってたんでしょ？私のこと。ずっと」

何も答えない宗司。

琴美「（笑って）認めるよ。面白い記事が書け
そうでよかったね」

宗司の声「書かないよ」

琴美「いいよ。書きなよ、何でも。そのため
に近くにいたんでしょ？」

宗司の声「違う」

琴美「じゃ何で？」

電車が近づく音。

琴美「（投げやりに笑い）ごめん。もういいや。
切るね」

宗司の声「ちよ（っと待って）」

琴美「（遮り）じゃあ」

電話を切る琴美。そのまま電源を落とす。

ホームに到着する電車。乗り込む琴美。

○走る電車の中

窓の外を流れる景色を見ている琴美。

その窓ガラスに水滴が当たりだす。速度を増していく電車。ガラスに当たった水滴が風に流されて鋭く尾を引く。激しくなる雨。窓ガラス全面が濡れ、外の景色がぼやけていく。微かに映る琴美の顔、ぐにやぐにやと歪む。

○切通

全身ずぶ濡れの琴美が切通の中にいる。壁面に背を預けて立っていたが、やがてずり落ちるようになってその場にしゃがむ。岩壁に琴美の背丈のシミができている。琴美、震える手でタバコに火を点けようとする。が、タバコの先端が湿っていて着火しない。諦め、腹に目をやり、そのまま頭を膝に埋めるようにして体を丸める。ふいに子供の鼻歌のようなものが聞こえてくる。

琴美、顔を上げ、切通の入り口の方を見る。赤いワンピースの少女が、開いたまま転がっている赤い傘を拾い、それをさして歩いてくる。

朦朧とした表情の光子である。歩いてきた光子、琴美の前で立ち止まる。見上げる琴美。

先程までくつきりついていた背後のシミが壁に吸い込まれるようにして消える。

光子、しゃがんだままの琴美を見下ろし、ぼつりと、

光子「琴ちゃんいなかったら、みっちゃん一番だったのに」
それだけ言うと、また歩きだす。

光子の後ろ姿をしばし呆然と見つめる琴美。
琴美「ごめんね。……（呟く）ごめんなさい」

琴美、タバコをカバンにしまい、代わりに処方箋の紙袋を取り出す。

袋には『14日分』と印字されている。

水でふやけて角が破れ、中から輪ゴムで束ねられた錠剤が覗いている。

それを見つめる琴美。
そこへバシンツと大きな音が響く。
ビクツとして、音のした入口側を見る琴美。
フェンスの向こうに宗司の姿がある。
フェンスに手をかける宗司。揺れる金網。
無視して、ふらつきながら立ち上がり、光
子が歩いて行った方へ向かおうとする琴美。
宗司、金網をよじ登りながら、
宗司「待って」
琴美、宗司の方を向き、
琴美「なんで来るのよ」
宗司、フェンスの一番上に手をかけつつ、
宗司「好奇心？」
琴美「は？」
宗司「いや正直に言えば、多分それです。そ
れなんですけど……」
フェンスから飛び降りる宗司。
琴美「じゃあ満たしてあげよっか？その好奇
心……私ね、わかってたよ」
宗司「え？」
琴美「どうなるかわかった」
宗司「なんの話だよ」
琴美「相手が死ぬかもしれないって……違
う。殺したいと思っただけ。殺意があっ
た。あの時、確かに。どう？」
宗司「はい」
琴美「何それ」
宗司「だってそれしか言えない」
近づこうとする宗司。
琴美「これ以上近づかないで！私はそういう
人間なの！」
尚も近づこうとする宗司。
後ずさりする琴美。
宗司「俺、そんなこと言われたって、あなた
のこと許してやることもできないし、だから
「はい」としか言えないんだけど……」
逃げる琴美。
宗司「逃げないでよ」
琴美「そっちが逃げないから」
宗司「逃げる理由がないし」

琴美「意味わかんないよ」

宗司「お互い」

琴美の背後、墓地側の出口の方から光子の
声が。

光子の声「琴ちゃん」

琴美「：：呼んでる」

と宗司に背を向け歩きだす。

宗司「ちよつと待ってよ。全部はわかんない
けど少しはわかるから」

琴美「（振り向き）わかんないよ！何が言いた
いんだか」

宗司「あんたが思うより、俺や他の人間にだ
っておぞましい部分はあるって！」

さらに歩み寄りつつ、
宗司「それでも、いちいち誰かに許しを乞う
でもなく、なんでもないような顔して生きて
るんだよ。皆」

琴美「違うんだよ、そんなんとは。全然」

宗司「違うじゃない！あなた何もそんなに特別じ
やないです」

琴美「何がわかるのよ！あなたに」

宗司「いや、わかんないよ！そりゃわかんない
けど：：」

また光子の声。
光子の声「琴ちゃん、こっち」

出口側を向く琴美。
視線の先にはフェンスをすり抜けて歩く光
子の姿が。

琴美「呼んでる：：」

宗司「何言ってるんだよ」

琴美「（背を向けたまま）呼んでるの」

宗司「呼んでない！聞いてよちゃんと、こっ
ちの話！」

琴美、一瞬宗司の方を振り返り、
琴美「あなたに関係ないでしょ！ほつといて
よもう」

駆けだす琴美。

宗司「追いかけて、
宗司「自分のことばっか見てないでさ、周り
の人間のことも見たらどうだよ！もっとちゃ

んとさ」

琴美、バシッと思いきりフェンスにぶつかり、みっともなく倒れる。

瞬間、ふっと肩の力が抜け、宗司を見る。

そして、笑う。

琴美「あははっ！」

宗司、ほっとして、ゆっくり歩み寄ろうとする。

その足音に、木々の間を石が転がるような音が微かに重なっている。

暗転。

○真黒い画面

転がる石の音、勢いを増してピタッと止む。

直後、ゴツツ、バチャツという音が響く。

それから数秒、雨音だけが続く。

メイン・タイトル、出る。

『時雨』

やがてポツポツと傘に当たる雨音に変わり、明転。

○切通

墓地側の道から振り返る光子。

光子のさす赤い傘の下に、フェンスの内側で尻餅をついたままの琴美が収まっている。

遠近感により、光子が大きく琴美が小さい。

その小さな琴美の向こう側には、さらに小さく、切通の出口直下に倒れて動かなくなっている宗司の姿がある。

光子、向き直り歩きだす。

鼻歌（『通りゃんせ』のメロディー）など歌いながら歩き続ける。

光子と琴美の間のフェンスには、過剰なまでに『落石注意』の看板が掲げられている。

○猪川家・食卓（朝）

朝食をとっている宮子と琴美。

宮子、自分の目玉焼きに醤油をかけた後、

宮子「はい、お醤油」

と琴美に醤油を差し出す。

ぼーっとしている琴美。
宮子、まっすぐ琴美を見て、
宮子「お醤油。琴美」
琴美「はっと気づき、
琴美「ありがとう」
宮子の手から琴美の手へ渡される醤油。
琴美の隣の席には何も置かれていない。

○製薬会社・研究室

荷物を整理している信彦。
押田「あ、話さ、墓場まで持っていくつもりだから」
信彦「いいよ。捕まったって構わないんだ、もう。辛いぞ？そういうの、一人で抱えるっていうのは」
押田「辛くなったらお前の薬があるからな」
信彦「よせよ」
押田「（鼻で笑い）冗談だよ」
信彦も笑い、片づけを続ける。

○水族館

開館直後の水族館。
客が皆、口々に「イルカ、イルカ」と騒いで同じ方向へと流れていく。
土産売り場前に澤井がいる。
通路に面したキーホルダーコーナーで何やら物色中である。
琴美、通りかかり、その姿に気づくが、距離をとるようにして素通りする。
澤井「気づいて呼び止める。」
琴美「もしもし？」
澤井「ばつが悪そうに振り返る。」
琴美「余計に不自然じゃないですか」
澤井「あ、どうもー！長いことお世話様でしたー！」
澤井「ふんと笑って受け流す。」
琴美、澤井の横でずらりと並ぶキーホルダーを見て、

琴美「悠子ちゃんに？」

澤井「昨日の夜、ここ来る時に駄々こねられちゃって。＼また約束破ってー＼って」

琴美「ふーん」

澤井、真剣な目で選びながら、

澤井「しかし、どういいうのがいいのかね……」

琴美「どれもよくないと思いますけど」

澤井「（軽く笑って）棘があるねえ」

琴美、やや投げやりりに小さな溜め息をつき、

目の前に並ぶいくつものフックの先を見て、

琴美「グサグサグサグサー」

澤井「え？」

琴美「＼刺されー、抜けなくなれー＼って」

澤井「（笑って）えー、何よそれ？」

琴美「なんでもなーい。（再びわかりやすく溜

め息をついて）いいパパでムカつく」

澤井、少し嬉しげに琴美の方を向き、

澤井「あらら？ずいぶん素直な反応で」

琴美「馬鹿にしないで」

澤井「ごめん。（よくよく琴美の顔を見て）けど、なんだかほんと、だいぶスッキリして。

何か吹っ切れた？」

琴美「別に何も」

澤井「そう。毒かと思ってたけど、案外いい

菓だったのかね」

琴美「え？」

澤井「いや。毒は俺だけだったか」

琴美「そこはお互い様じゃないですか（笑う）」

澤井「（も笑い）あ、電話。悪かったね、すぐ

出られなくて。なんだったの？」

琴美「ああ。いいんです、もう。私の問題で

すから」

澤井「そうなの」

イルカコーナーが賑わいを増している。

＼赤ちゃん可愛いー＼などという女兒の声が聞こえてくる。

澤井、ふいに琴美の腰のあたりに目をやる。

琴美、気づいて、

琴美「（笑い）よしてよ、太っただけ」

澤井「（少しほっとして）そう」

琴美「じゃあ、そろそろ」

とその場を去ろうとする。

澤井「ねえ。また、会えるよね？」

琴美「そちらさん次第じゃないですか？」

澤井「嘘だよー？あなた次第じゃないの。いっただって」

琴美「ですかね。ごめんなさい」

澤井「いや」

琴美「（目を合わせず）もうないかも」

澤井「……」

琴美「（目を見て微笑み）お元気で」
去る琴美。

取り残される澤井。

琴美の後ろ姿。腰周りは少し丸みを帯びた印象である。

○同・バックヤード

スポイトでクラゲに餌付けする琴美。

ぼーっとしている。

スポイトの先からぽつりと滴る透明の液体。

無反応のクラゲたち。

青い光の中、白い頭や足を揺らめかせている。

○総合病院・病室

開け放たれた窓。

青い空をバックに、白いカーテンが揺れている。

男女三人の足音が響く。

革靴、パンプス、スニーカーがばらばらの

リズムでドア側へと遠ざかる。

ドアが開いて閉まる音。

ベッドの上には、頭に包帯を巻かれて眠る

宗司の姿がある。

廊下から話し声が聞こえてくる。

男の声「また顔出してみるよ」

女の声「ええ」

遠ざかっていく三人の足音。

女の声「亘も、また来てくれる？」

足音だけが続く。

○ 同・廊下

ゆったりとした服装の琴美。
エレベーターを降り、廊下を歩く。
50代後半くらいの男女と、20代前半くらいの
男の三人連れとすれ違う。
女、琴美とすれ違った直後、
女「（若い男に）……来てね。待ってるから」
琴美、その声に反応して一瞬振り返るが、
すぐに向き直り歩き続ける。

○ 同・病室

宗司の眠るベッドの傍ら、パイプ椅子に腰
掛けている琴美。
風に揺れるカーテンの向こうの、外の景色
を眺めている。
と、微かに布団が擦れるような音が。
琴美、それに気づいて宗司を見る。

琴美「……おはよう」
宗司「……ああ」

ぼんやりとした反応の宗司。
が、辺りを見回そうとして自分の腕に刺さ
った点滴の針に気づき、ビクツとなる。
琴美、一度小さく安堵のため息をつくと、
すぐに意地悪な笑みを浮かべ、
琴美「刺さってるねー、完全に」

宗司「うーわ」という顔つきで、必死で
体をよじらせようとする。

琴美「その様子をしばし笑って眺めた後、
琴美「ねえ、わかる？」

宗司「（うんざりした表情で）わかりますよ。
鬼だ、鬼」

じたばたするのをやめ、ほのかに笑って、
宗司「――鬼。やっとなまえた」
琴美「え？（笑）」

八重歯が覗く。
しかし無邪気な笑みである。